
夏の太陽の下へ

桐谷瑞香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の太陽の下へ

【Nコード】

N2027K

【作者名】

桐谷瑞香

【あらすじ】

とある夏の午後、光二と義樹は街角の隅で「喫茶店ソレイユ・デ・レテ」に出会う。そこはとても優しい青年が営んでいる小さな喫茶店であった。そんな彼と、そして彼を慕っている少女たちと共に短くも楽しい夏が始まるが――。

明日へ続く、淡い恋愛を含めた青春小説。

第1話 まずは水を一杯どうぞ (1) (前書き)

まずは拙作に目をとめて頂き、ありがとうございます。

この小説は中から長編程度になる予定の青春小説になります。

まだまだ鋭意執筆中ですので、よろしければのんびりとお付き合
い頂けたら幸いです。

では、皆さまのお時間に少しでも潤いができますように――。

第1話　まずは水を一杯どうぞ　（1）

さあ、午後のティータイムの時間ですよ。

今日は前から欲しかった茶葉を手に入れることができたから、それを使いましょう。私も大好きな茶葉、味はもちろんのこと、とてもいい香りがするのよ。

今、新鮮な水を沸騰させているからもう少し待っていて。沸かし過ぎないように注意しましょうね。

あ、そうそう、紅茶と言っても、あなたは何が飲みたい？

このまま紅茶を飲む？ それとも砂糖やミルクでも入れる？

それとも氷を入れて、アイスティーでもいいと思う。ほら外はとても暑いんだから、きつと美味しいわよ。

人それぞれ好みは違うんだから、自分が好きな味を言っただけだよ。

そう、あなたが本当に望んでいる味を――。

* * *

「どうして……、どうして、こんなに暑いんだ！」

「そんなに暑いって連呼するな。余計に暑くなってくるだろ」

「じゃあ、寒い、寒いって言えばいいのか？」

「……それも変だから、とりあえず黙っている」

蝉が喧しく鳴いている昼下がりの時間帯、七月の終わりの日曜日に、まだあどけなさが残る二人の少年が、大量の汗をかきながら自転車を押して歩いていた。よく見ると、タイヤは二台ともパンクし

ている。前に備え付けられているカゴからは透明なプールバックが乱雑に投げ込まれており、苛立ちが目に見えてわかるようだ。ふと僅かにぬるい風が吹き、少年たちの生乾きの髪が微かに揺れる。

始めに悪態を吐いた半袖のパーカーを着ている癖毛の少年は、その風が吹いた方向に視線を向けると、急に立ち止まった。そして次の瞬間ハンドルから手を放し、一人で駆けだし始めたのだ。自転車は音をたててアスファルトに叩きつけられる。

「おい、義樹！」

柔らかな髪で、薄手のベストを着ている少年が何事かと呼び止める。だが義樹と呼ばれた少年は、全速力で走っていく。

「義樹、どこ行く気だ！」

何を言っても聞く耳を持たない松原義樹の後を慌てて追い始める。しかし彼はすぐに足を止めた。

不思議に思いながら、彼の視線の先を辿る。そこには——一台の自動販売機があつたのだ。

「よっしゃ！ 飲み物ゲットだぜ！」

義樹はポケットから小銭を何枚か出して、硬貨投入口に入れ込む。そして勢いよくボタンを押したのだ。ようやく自動販売機まで追いついた少年はその様子を見て、「あつ」と声を漏らした。

「何だ、光二、欲しくてもやらないぞ」

「義樹……、よく見たか、その自販機に貼ってある注意書き」

「はあ？ 自販機に注意書きなんかあるわけ——」

義樹は高山光二に促されて、ゆっくりと視線を左へ移し、そこに赤い文字で印刷されている紙を見て、固まった。

『申し訳ありませんが、現在この自動販売機は壊れております。お金を投入はできますが、中身は出てきませんのでお気をつけてください』

一瞬、空気が凍り付く。
だがすぐに碎け散った。

「うわー！ 俺の金返せー！」

突然絶叫しながら、義樹は自動販売機を叩き始めたのだ。どこか一歩引いて見ていた光二も自転車を停めて、さすがに止めに入る。背中から両手で取り押さえようとしたが、それでも義樹は叩くのをやめようとはしない。

「お願いだから、落ち着け、義樹！」

「落ち着けられるか！ 俺の百五十円返せ！」

「百五十円くらいでぐたと言うな！ というか、叩く前にすることがあるだろう！」

「叩く以外にすることなんてない！」

「もうわかったから、本当に少し黙っている！」

そう言うつと、光二は義樹を力ずくで横へと投げ飛ばす。義樹が呆気にとられている間に地面へと打ちつけた。そして打った背中をさするのを横目で見つつも、涼しい顔をしながら硬貨返却口を回す。すると硬貨が何かに向かって落ちる小気味いい音が鳴り響いた。

「……へ？」

口をあぐりと開ける義樹。それに対して、肩をすくませながら、

光二は取り返した小銭を彼へと渡した。

「叩く前にすることがあっただろう。お願いだから、こんな恥ずかしいこと本当にもう二度としないでくれ」

「ああ、気をつけるよ。サンキュー、金を取り戻してくれて」

「……その言葉、いつも聞いているが、一応受け取っておこう」

光二はやれやれと自転車に寄りかかりながら、義樹が道に倒した自転車をおこすのを眺めていた。そして彼がゆっくりと押し始めると、横に並びながら再び歩き始める。

「なあ、とりあえず喉渴いたんだけど。けど金はなるべくなら使いたくないんだ」

「俺に言っても何も出ない。大人しく家に帰ろう。まったく誰のせいでこんな目にあっただ。義樹、この代償は高く——」

口を開いている途中で、再び隣の車輪が回る音が止まった。

よく見れば義樹が口を微かに開けながら、ある建物を見て立ち止まっている。少し戻って、その建物を見てみた。

住宅街の一角にある建物で、流し目に見ればただの家だと思うだろう。だが、よく見ればこぢんまりとしつつも、どこか落ち着いた上品が漂ってくる、焦げ茶色の木造一階建ての店。

扉の前にある看板に目を落とすと、そこには？喫茶店 ソレイユ・デ・レテ”と書かれていた。

「喫茶店？ こんなところにそんなものがあつたのか」

住宅街の真つただ中、余所から来た人にはわかりにくい場所だ。

「……なあ、光二君」

その呼び方に一瞬悪寒が走った。そしてゆっくりと義樹を見ると、そこには満面の笑みを浮かべている彼がいた。顔を引きつらせながら受け答えをする。

「何だい、義樹。……あそこに見える大通りまで行けば、きっとコンビニくらいはある」

「あそこまで何百メートルあるんだ？ それにコンビニがある保証なんてあるのか？」

「悪いが俺は時間が無いんだ。まだ塾の宿題が終わっていないし、次の中三模試では点数を——」

「宿題が終わつたら、息抜きに一緒にプールに行くって言っただろう。なああそこで——、水飲ませてもらおうよ！ そうだ、それが一番いい！」

「断る！ 水を飲むだけに喫茶店に入るなんて、そんな恥ずかしいことできるか！」

「恥ずかしくないよ。ただ水を——」

「いいか義樹。もう少し状況を整理してから言え。まず今は午後のティータイムの時間帯。それなりに人が入っているだろう。次にここは住宅街の中にある喫茶店。おそらく客のほとんどがこの辺の人。ここら辺は俺たちが使っているプールの通り道だから、再び遭遇する確率が高い。そんな中で喫茶店に入って、『水だけ飲みに来た可

哀想な男子中学生』って憐れむような目でこれから見られたら……

！　そんなリスクを背負ってまで俺は――、って、人の話聞け！」

光二の叫びも虚しく、義樹は意気揚々と扉を引いていた。中から少しひんやりとした冷気が漏れてくる。その誘惑的な涼しさは中に入らないと決めていた光二の考えを鈍らせた。

自宅から自転車で二十分程走らせたところにある市営プールに行っていた二人だったが、帰りの自転車を走らせている途中で、空気が抜けてしまったのだ。つまりパンク。行く時は何も変わったところはないから、誰かがタイヤに針を刺したという、何とも幼稚な被害にあつたらしい。そこでも義樹が暴走したのは言うまでもなかった。

そして三十分近く炎天下の中を歩き続けたため、体力は大幅に減少。時計を何度も見たが、一向に進む気配はない。本当ならコンビニでも通り過ぎたらそこで涼もつかとも考えたが、一分でも早く帰ろうと光二が提案してしまったがために、何もない住宅街をひたすら歩いていたのだ。そのため冷房の室内は非常に魅力的だった。

様々な考えが脳内を駆け巡る。その中には財布の残金を確かめることも。

そして義樹が勢いよく扉を開けて、カランカランとお客を出迎えるかのような音が鳴り響いた頃には、肩をがっくりと頂垂れつつもその背中にしっかりと着いていった。

まず光二が扉を開いて感じたことは、地獄から天国へと駆け上るようなほっとするような涼しさ。照りつける太陽の下から逃れたことも、嬉しかった。

よく見れば、前にいた少年はいつも以上にへらへらと顔を緩ましており、躊躇い無く中へと踏み入れている。それと同時に、落ちて着いたテノールの声が耳に入ってきた。

「いらっしやいませ。ソレイユ・デ・レテ、へようこそ」

顔を前に向けると、目の前にはすらりとした身長眼鏡をかけている青年が愛想良く笑みを浮かべていた。長袖のワイシャツを腕までめくりつつ、黒く長いエプロンを掛け、その間から色を抑えた赤色のネクタイが見える。そして長い黒髪を脇に結んでいた。

「お客様は二人でよろしいですか？」

どこか柔らかな雰囲気を漂わせる青年が話しかけて来る。一方、前にいた義樹は何も反応せずに立ちすくんでいた。

「二人でいいのかな、君たち？」

義樹からは何も言おうとはしていないのか。肝心な時にまったく何もしないなんて、と思いつつ、代わりに応えた。

「あ、二人です。……おい義樹、立ち止っているなよ」

しかし呼びかけても反応はなく、呆けている。その様子に対して心の中で嘆息した。

「すみません、ちょっと太陽に当たりすぎて、頭が疲れたみたいですよ」

「それは大変だったようだね。ゆっくりと休んでいくといいよ。では、席にご案内します」

光二は義樹を引きずりながら席へと足を向ける。

店内は全体的に落ち着いた雰囲気が漂っていた。木の温もりが感じられる、柔らかい感じの椅子や机、所々にこしらえているアンティークもの。そして心地よいクラシックの音楽が静かに店内を流れている。

ほとんど満席に近い店内で、少し中に入った通路側の四人席へと案内された。

お水をお持ちしますと言って、店員が去っていく。席に着くと、まずは荷物を置き、そして汗でべた付いた時計をテーブルの端の方に置いた。

だが義樹は荷物を下ろすでもなく、店員の方に視線を向けている。まだ変な様子の義樹を意図的にじろじろと見たが、反応はなし。どうやら彼自身の世界に浸っているようだ。

やがて戻ってきた店員がメニューと冷たい水が入ったグラスを差し出した瞬間に、光二は一瞬で顔を引きつらせた。義樹がその手を離すまいと両手で店員の右手を握りしめたのだ。予想外のことだったのか、店員は驚くのを乗り越して、きよんとしている。

すぐにやめさせなくては——そう思った矢先、再びカランとドアベルが鳴るのが聞こえてきた。義樹が不愉快な顔をしつつも気を取られた所で、店員は手をあつさりといのけて、入ってきた客を迎える。

「いらっしやいませ。……あ、恵美香ちゃんに水菜ちゃん。こんにちは」

少女が二人、店内へと足を踏み入れてきた。

「こんにちは、洋さん。席、空いていますか？」

可愛らしい声を発し、お淑やかそうな少女。目はくるりんとして柔らかにウェーブがかかった髪を肩の後ろまでおろし、ふわふわしたスカートを可愛らしく着こなしている。そして薄いカーディガンを羽織っていた。

その彼女が入ってきた時から、義樹から発せられる気配は明らかに何かが変わっていた。光二は奇異な視線を送り続けたがまったく気づくこともしない。ただ入り口で洋と呼ばれた店員と話している少女に今度は見入っているようだ。

「義樹、いい加減に妄想の世界から元の世界へ——」

「か、可愛すぎる。——惚れた」

「はい？」

光二の突っ込みなどまったく意に介さず、ただ義樹は彼女を見つめていた。その彼女と洋の会話に耳を澄ましている。

「今日はもう満杯なんですね」

義樹が惚れたと言った少女——池中恵美香は残念そうに肩をすくめる。

「ごめんね。少し今日は人の入りが多くて」

「いつもより遅く来てしまった私たちも悪いので。どうする、

水菜？」

恵美香は後ろにいるポニーテールの髪型をしたもう一人の少女――鈴原水菜に話しかけた。

「ざっと店内見た感じだと、すぐ空きそうにはなさそう。恵美香、出直す？ 別に今日じゃなくてもいいし」

「そうね。図書館で他の教科でも――」

その言葉に割り込むように、義樹はすつと彼女たちの元へと歩み寄った。光二が止める時間すら与えてくれない。不審そうな目で見る水菜がいる一方、不思議そうに見る恵美香。

そんな中、突然義樹は左膝を付きながら、右手を差し出した。そして彼としてはとびきりの笑顔で声を出したのだ。

「お嬢さん方、一緒にお茶でもどうですか？」

店内の時が一瞬止まった。洋でさえ、笑顔のまま微動だにしないかった。

だがその沈黙は速攻で破ることになる。

「初対面の女子に何やっているんだ、このバカ！」

周りなど気にしない大声を発し、義樹の後頭部にプールバックが炸裂する。彼は前の子になりつつも、痛さを堪えるために歯を噛みしめて、後ろを睨みつけた。だがそこには世にも恐ろしい形相をした光二が、腕を組みながら仁王立ちしている。

「お前な、人さまに突然絡むとはいったいどういうご用件だ？」

「か、絡んだとは、人聞きのわ、悪い、い、言い方だな」

何度も噛みながらも、精一杯受け答えをする。しかし、光二にはまったく通用しなかった。

「お前といったら、俺の人柄まで疑われるだろう！ 俺の身にもなれ！」

「な、何が悪いんだよ。別に……」

「少しは黙っている！ もう帰る」

「え……」

義樹の表情が今までと一転した。酷く真面目そうに、困った顔を

する。光二は大股でさつきまで座っていた席へと引き返し、荷物を持って、再び入り口へと戻ってきた。そして洋へと頭を下げる。

「お騒がせしました。彼女たちに席を俺たちがいた席にでも案内してください」

「あ、でも……」

慌てて止めようとしたらしいが、それも聞かずに扉に近づく。

「ごめんなさい、私たちが来たばかりに」

恵美香が申し訳なさそうに言葉を濁した。光二は努めて笑顔で返す。

「いや、俺たちもたった今、ふらりと寄っただけです。特にこれといって用事があるわけでもないし。そちらの方がここの喫茶店に用があるんでしょう？」

「え、ええ」

「なら気にしないで。あと、このバカのことはずぐに忘れてくれ」
床に座り込んでいる義樹を指し、まだ動きそうになさそうだった彼のパーカーのフードを掴みながら、ずるずると引きずる。

そして出入り口に近づいたところで、今度は水菜が近寄ってきた。

「……ありがとう。大変ね、そんな人と一緒にいて」

「まあこいつと一緒にいて飽きはしないな」

光二が苦笑いをしながら水菜を真正面から見た。お淑やかな恵美香とは対称的に、はつらつとした雰囲気がある。

だがその顔を見た時、何か光二の心にひっかった。数瞬立ち止ったが、すぐに心の中で思考を遮断し、視線を逸らして出入り口の前に行く。

そして最後に洋に対して、深々と頭を下げながら、再び炎天下の中へと出て行った。

喫茶店から出た光二は、義樹に彼自身の自転車を押させながら途中まで一緒に歩いていた。だが、間もなくして適当な所で分かれた。

いつもはもう少し先まで一緒に帰っていたが、どこか居たたまれない視線を向けられて、溜まらず逃げ出したのだ。

照りつける太陽が熱い。暑さのピークは過ぎた時間帯だが、それでも夏の暑さは堪える。早く家に帰って、涼もうと思いい、汗で濡れている手でハンドルをきつく握りしめ、一気に駆け足気味に押し始めた。

喫茶店から出てから二十分ほどしてようやく家の前に辿り着いた。自転車置き場に停めて、暑さから逃れるように急いで中へと入っていった。

帰るなり、すぐにシャワーを浴び、部屋に入ると冷房をつけて優雅に涼み始める。

「はあ、生き返る。さっきまでの暑さが嘘のようだ……」
部屋のベッドを転がりながら、暑くないという素晴らしさについて身を持って実感していた。

「それにしても義樹のやつ、一目惚れしていたな。確かにあの子は可愛かったけど、あんなことしちゃ、どん引きされる。まったく何やってるんだか」

時に非常識な行動に出る友人に対しては、溜息を吐くしかない。しばらく横になっていると、次第に睡魔が襲ってくる。それに逆らうこともせず、眠りに落ちてしまった。

第1話　まずは水を一杯どうぞ　（2）

気が付いたら外は真っ暗になっていた。大きく伸びをしながら、体を起こす。そして塾の教科書やノートを机に並べて、ゆっくりと椅子に座った。

塾で特別選抜コースに入っている光二はいつも宿題に追われている。まだ夏休みの始めであるから少なめであるが、これがお盆の連休前になったら大量に出るのは目に見えている。

「明日は単語テスト。間違えると書き取りだからな。夕飯まで勉強するか」

卓上時計をちらりと見ながら、シャープンを持つ。ふとそこで違和感を覚えた。

いつも卓上時計の横に腕時計を置いていた。だが今日は置いていない。

どこにやったかと疑問に思い、鞆の中を探したがない。シャワーを浴びたときに外したかもしれないと思い、浴槽の方に行ってみる。だがそこにもまったく影も形もなかった。

いつ外したのか、昼寝をする前の時間を遡ってみる。

——プールに行ったときは付けていた。貴重品入れに預けたのは確かに覚えている。そして帰り道も時間を気にして見たから……。

「あつ」

ある所に思い当たった。そしてその事実気づくと顔を引きつらせながら、頭を抱える。

「……まったく、どうして俺はこういう所で抜けているんだ。義樹には絶対言えない」

などつぶつぶ言いながら、明日の予定を確認し始める。

夜になっても相変わらず蒸し暑く、また光二の心の中もややもやとしたものでいっぱいであった。

* * *

次の日の午前中、光二は割と身軽な格好で家を出た。十時前ではあるが、少しずつ上がっている気温のためか通りを歩いている人はあまりいない。自転車のパンクは昨夜の内に父親が直してくれたのか、タイヤはしっかりと膨らんでいる。それにまたがり、人目を若干気にしながら走らせ始めた。

昨日自転車を転がしていた道を戻りながら、角を曲がったり、進んだりする。地図を頭の中で具体的に作って考えてみると、意外に近いところに目的の場所はあるのかもしれない。もうすぐそこだと何となく察していた。

だがその場所が見えてきたときに、光二は急にブレーキをかける。そして慌てて自転車ごと道の右脇に寄せ、電信柱の後ろに隠れるように滑り込んだ。手を胸に押さえながら、上がる心拍数を直に感じる。

——何で、何でいるんだよ、こんな早く！

陰からちらりと向かっていた場所を見ると、そこにはあのトラブルメーカーの義樹がそわそわしながら、喫茶店ソレイユ・デ・レテの中を覗いているのだ。

「あいつ、朝はすごく弱いはずだろう。午前中の授業なんてほとんど机に突っ伏しているのに、どうしてこんな時間に出歩いているんだ」

極力声を抑えながら、悪態を吐く。

この時間帯に一番いるべきでない人物、そして一番出会いたくなかった人物がいるため、動揺を隠せなかった。

あの状態からすると、どうやら中はまだ開店していないらしい。それは想定内のことだ。だからこそ、この時間帯に来たというのもある。

しかし、あの少年がいることは完全に想定外だった。
出直すか、それとも強行突破をするか。

一人心の中で自問自答していると、とある車が静かに横に止まった。それをきっかけとして、光二は反射的に自転車のハンドルを持ち、来た道を戻ろうとする。

「あ、待ってくれ、君」

突然、車の中から声が飛んできた。はっとして、その車内にいる人物を見ると、そこには眼鏡をかけたあの喫茶店の店員が窓から顔を出しているのだ。

「こ、こんにちは」

若干歯切れを悪くして返答する。

その店員——洋は特に気にすることなく微笑んだ。

「もしかして時計の忘れ物、取りに来た？」

真っ先に核心を突かれて、一瞬止まってしまふ。だがすぐに首を縦に振った。

「そうです！ それを取りに来たんですが……」

ちらりと喫茶店の方に視線をやる。まだあの少年はうろろろとしていた。

「彼は君と一緒にいた——」

「あいつ、追いついてくれませんか？」

「え、一体どうして」

意外な言葉だったのだろう、疑問をそのまま表情に出している。

「とりあえず、この場で会いたくないんです。昨日のあいつの行動見たでしょう。もういい加減にしろ——」

何やら不快な声が聞こえてきて、言葉を途中で切る。恐る恐る視線を洋から喫茶店の方に移すと、義樹が手を振りながら駆け寄って来るのだ。

「光二くーん！」

——き、気づかれた！

急いで自転車を反転し、サドルに腰を下ろそうとする。だが時す

でに遅く、息を切らした義樹ががちりと自転車の後部を握りしめていた。

「どこ行くんだよ、マイパートナー！」

「誰がお前のパートナーだ！ ただの腐れ縁だろ！」

「そういう風にも言うかもしれないが、別にいいじゃないか。どうしてここににいるんだ？」

「それは俺が聞きたい！」

必死に払おうとするが、びくともしない。そういえば、無駄に握力は強かったという事実が思考を横切る。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

柔らかなだが、はつきりとした口調で洋が止めに入る。

「ここで口論するのは、少し場所的に悪い。とりあえず喫茶店の中に入らないかい？」

「ええ、いいんですか！」

義樹が嬉しそうに洋にすり寄ってくる。それをニコニコしながら、首を縦に振っていた。

今、義樹が離れた隙に逃げるという手もある。だが、見つかったしまつたら同じだし、何となくだが少しこの青年に興味があった。どこか惹きつけるような優しい雰囲気。

嫌そうな表情をしながらも、微笑んでいる洋に促されて、喫茶店へと向かった。

洋が喫茶店の脇に車を止め、裏口から中に入る。光二たちも小さな厨房を通りながら、店の方へと足を踏み入れた。

その瞬間、何か頭に引っかかる現象に陥る。前とは少し違う雰囲気を感じ取れたのだ。

「適当に座っていて。水でも用意するから」

洋は冷房のスイッチを入れ、昼間に合わせて明かりを抑えて電気を付ける。そして徐々にだが、心の中に自然に流れ込んでくるような音が喫茶店中に響きわたり始めたのだ。

あれだけ苛立ちを立てていた心の中が浄化されるような感じがす

る。優しく、そして心休まる音色――。

さっきの違和感はこの音楽の存在の有無だったようだ。この前は入った瞬間から、音楽があつた。癒しを与えてくれる音楽を。

義樹はそういう音楽や芸術的感覚はまったくないためか、ただそわそわと洋が支度をしているのを眺めている。やれやれと思いながら、改めて店内を見渡してみた。

簡素とも感じ取れるが、それがまた落ち着いた雰囲気醸し出していてまたいい。店内に置かれている観葉植物も、そこにささやかな色を取り入れているようだ。

やがて、洋が涼しげな音を鳴らしながら、氷が入った水を前に置いた。

「すぐに用意できるのが水しかなくて、ごめんね」

「いえいえ、喉乾いていたんで、むしろ有り難いです！」

そう言うや否や、義樹は一気に水を飲み干した。

「はあ、生き返る」

「まだたくさんあるから、いくらでもどうぞ」

洋は水を入れた銀製のポットを注ぎながら、クスツと笑った。義樹は調子に乗って、またごくごくと喉に通す。それを横目で見ながら、光二もちまちまと飲み始めた。そういえば前は飲みそびれたな……などと、思いながら。

そして光二がようやく一杯飲み終わった頃、義樹は一目散にトイレへと駆け込んで行ってしまっていた。それを見ていた洋は目を丸くしている。

「あいつ、飲み過ぎですかい？」

「そうだね、五杯くらい一気に飲んでいたから」

「……いつものことなので、気にしないでください。そうだ、今の内に時計の方、返しくれませんか？」

「ああ、そうだったね」

洋はテーブルにポットを置くと、カウンター内へと戻っていく。そしてすぐに時計を持ってきた。使い古され、見ればすぐにわかる

安物の腕時計。それが光二の手のひらに戻ってくると、思わず少しだけ安堵した。

「大切なもののなの？」

「違いますよ。ただいつも使っていたものだから、ないと落ち着かなかっただけです」

即答をし、再び左腕に通し、留金を閉じてそこに収まった。

「さて、用も済んだことだし、俺は帰ります」

椅子を引きながら立ち上がり、小さく頭を下げた。

「君のお友達は？」

「あいつはあいつで別の目的で来たみたいですから、俺には関係ありません。邪魔なら適当に追い出してください」

今日の目的は時計を返してもらうこと。それ以上は長居をする理由は何もない。

「光二、帰るのかよ！」

しかし現実は大体そのうるさい奴が止めに入る。トイレから慌てて出てきたばかりの義樹がまたしても、何か訴えるような視線を送ってきた。

「もう少しいようよ。なあ、構わないだろ、洋さん？ もっと話をしたいんだ！」

「まあ、あまり相手はできないけど、開店する前くらいまでなら……。わざわざ開店前に来たということはそれなりに理由があっただろうし」

洋はカウンターの中で買い物袋から取り出したものを、冷蔵庫へ移動しながら答える。そしてちらっと光二の方にも視線が向く。

「光二君だっけ、よかったらもう少しいたら？ 紅茶でも一杯サービスするから。それとも忙しい？」

少し押し気味に言われ、光二は心の中で躊躇ってしまう。時計を取りに来るのが第一目的だが、もし余裕があれば洋と話をしてみたいという願望はあった。そして彼がどこか困ったような顔をしているのを見ると、また別の意味でいなければならぬという感じを受

けてしまう。

そんな二人の考えなどお構いなしに、義樹は無理に会話に割り込んでくる。

「俺は、俺は？ 紅茶！」

「もちろん君にも。えつと……」

「俺は松原義樹！ サッカーが超大好きな中学三年生！」

元気よく答える姿は小学生と同程度と言ったところか。確かに初対面なのにこんなに馴れ馴れしいやつと一緒に話していたら、困るよな…… と思い、光二は再び椅子に座り込んだ。

「……高山光二です。こいつと同級生で、サッカー部に所属していました。時間は少しあるので、お言葉に甘えて紅茶の方をごちそうになります」

「光二！」

「うるさいから離れている」

鋭く睨み付けながら牽制をかける。だがまったくそれを感じておらず、目の前に堂々と座り込んだ。

深々と溜息を吐きつつもカウンターの影から顔を出した洋の方向を見た。

「義樹君に光二君か、よろしく。僕はこの喫茶店ソレイユ・デ・レテを経営している上原陽洋^{あきひろ}。お客さん方からは、洋^{ひょう}って呼ばれている。まあ、僕しか従業員はいない、本当に小さな喫茶店だけど、よかったですらゆっくりしていいって」

そして頬を緩ませながら、唯一の店員は二人に自己紹介をした。思わず見とれそうな、何の混じりけのないような素敵な笑顔で。

第1話　まずは水を一杯どうぞ　（3）

「そういえば、義樹君はどうしてこんなに朝早くから来ているんだい？」

お湯を煮立てながら、洋がふとした疑問を言葉に漏らす。光二も聞きたいと思っていた内容だった。

質問された義樹は目を輝かせながら、洋の方に視線を送る。

「ねえ洋さん、昨日の女の子たちって、一体誰なの？」

——そういえば、こいつは何かにはまったら突っ走るタイプだった。

光二は頭を抑えながら、義樹の意図を感じ取った。気を紛らわせるために、水を喉に通す。一方、洋は目をパチクリしながら、投げられた言葉を返す。

「昨日の女の子……、ああ、君たちが席を譲ってあげた女の子のこと？」

「そうそう、その子たち！　何て名前なの？　特にあのお嬢様の子」

「あの子は池中恵美香ちゃん。もう一人が鈴原水菜ちゃん。君たちと同じ——」

洋の言葉を聞いて、思わず光二は水を吐き出しそうになった。それを堪えるために勢いよく水を飲み込んでしまったため、逆にむせてしまう。

「何だよ、光二、汚いな」

「べ、別にいいだろ。お前はいつもやっているじゃないか」

「そうだったけ？　まあいいや。——それで俺たちと同じ何だったけ、洋さん」

義樹は光二の奇異な行動に対して追及などせず、話を続けていく。

「中学三年生だよ」

「へえ、同じか……。そしてあの子、恵美香ちゃんって言うんだ。凄くお上品な感じ。さぞお嬢様で素敵な女性なんだね」

「まあ、とてもいい子だね」

「そうか……」

義樹がヘラヘラとしながら妄想をしているようだ。普通なら注意するべきであったが、どうも光二は別のことが頭の中で引っかかっていた。

洋が発した言葉の中に懐かしい響きがあったのだ。だが、少し違和感があり、本当に昔の響きと同じなのかはわからなかった。聞き間違いかもしれないし、ただの偶然かもしれない。

そんなことを考えながら、グラスの中の氷が少しずつ溶けるのをただじっと見つめていた。

「光二君、義樹君、アイスティーにミルクやレモンは入れる？」

洋が妄想にふけっている少年と、何やら思い詰めた表情をしている少年をちらりと見ていた。

光二ははつとして、未だにぼけつとしている義樹をひっぱたく。

何かが潰されたような、低いうめき声を出す。

「俺はストレートでいいです」

「最近、突っ込み激しいぜ、光二。俺、あんまり紅茶とか飲まないから、こだわりとかないんだけど。ああ、牛乳好きなんで、たくさん入れてほしいな」

「了解。もう少しだけ待っていて」

洋はそう言うと、引き続き手際よく準備を進める。

やがて、あつという間にアイスティーとミルクティーを運んできた。それを二人の前に丁寧に置く。

細長いグラスの中に、氷が何段も積み重なり、それに紅色の液体が色鮮やかに流れ込んでいる。ガムシロップを少し入れ、ストローを差してかき混ぜてから、飲み始めた。

上品な感じであるようにみえるが、口に含んでみれば非常に飲みやすい。何も抵抗などせずに、胃の中に入っていく。今まで飲んだアイスティーはどこか一歩近寄りにくい雰囲気があったが、これなら何杯でもいけそうだ。

「……美味しい」

思わず漏らした言葉を聞いて洋は微笑んでいる。隣ではごくぐくと何も感じず飲んでいる人もいるが今は気にしない。

「滑らかな舌触りで、あまり紅茶とか飲まない俺でも好きになれそうです」

「それは嬉しい誉め言葉をありがとう。お茶の方は専門ではないけど、勉強したかいがあったよ」

「え、専門では——」

「はあ、美味しかった！ 洋さん、ごちそうさま。ねえねえ、恵美香ちゃんたちって、次にいつ来るかわかる？」

一瞬でグラス一杯を飲み干した義樹は逸る心を抑えながら、洋を見つめていた。

「彼女らは日曜の昼はたいてい来るよ。そこで英語の勉強を教えたりしている」

「ええ、洋さんって英語できるの？」

「一応、英文学科出身だから、それなりに勉強はしたよ」

「へえ、何だかすごいな！」

「それほどでもないから。所詮過去のことだし」

洋が頬をかきながら、どこか自嘲気味に答える。

だが、中学の受験英語で戸惑っている彼らにとっては、尊敬に値することだった。

義樹はこの通りと言っているのかわからないが、勉強はほとんどしないし、光二だって英語は得意な方ではない。偏差値の高い私立や国立レベルの高校入試になれば、読むのだって一苦勞である。それから内容を解釈するのはさらに時間がかかっていた。

「洋さん、頼めば俺にも英語の勉強を教えてくださいませんか？」

誘惑的な言葉に惹かれて、思わず発してしまう。だが返答は少し困惑気味だった。

「え、僕が？ あまり勧めはしないよ。僕より学校の先生や塾の先生の方が色々とわかっていると思うし」

「……学校の先生も塾の先生もそりが合わないんです。それに、あの人たちに質問するの、何か苦手で」

上から目線で生徒たちを見ている先生。本人たちはあまり自覚していないようだ、裏ではあまり近づきたくない先生として独走していた。それに比べたら、洋は非常に話しやすく、些細なことでも何でも聞けそうだ。

「忙しいなら、大丈夫です。本業は喫茶の運営だし……」

少し一歩下がってみる。洋は腕を組みながら困った表情をほとんど動かさなかったが、即否定をする感じではなかった。

じりじりと待っていたが、やがて軽くうなずいた。

「わかった。僕がわかる範囲なら構わないよ」

「ありがとうございます！」

思わぬ収穫に、明るい表情以上に内心かなり喜ぶ。それが伝わったのか、洋は若干照れを隠していた。

そのやり取りを横目で見ていた義樹はどこかつまらなそうだ。

「勉強ねえ、光二も好きだよな、本当に。俺たち、一応受験生だけど、まだ半年も先のことじゃないか。まだ気合い入れる時期じゃないと思うけど」

「まあ、実際の入試はまだ先だが、併願推薦とかの確約をもらうために、九月からの模試で点数を取る必要があるし、それに県立入試だって内申がいいのに越したことはない」

「はいはい、光二君は真面目だからね。……それくらい俺だって知っていますよ」

その言い方に、光二は眉をひそめた。真っ直ぐな言い方ではなくどこか歪めて、皮肉めいた言い方。楽しそうにサッカーボールを蹴ったり、誰かに夢中になっている少年ではなく、何かから視線を逸らしている姿。

そんな義樹を見るのはほとんど見たことがないため、その後、どう会話を続ければいいかわからなかった。

だが、その気まずい雰囲気を感じて、打破してくれる人もこの

空間にはいたのだ。

「二人とも、お水のお代わりは？」

洋が氷を鳴らしながら、冷たい水を持ってくる。光二は首を横に振ったが、義樹はすぐにグラスを持ち上げた。

「もう一杯！」

「お腹の方は大丈夫？　あまり無理して飲まないでね」

そう言いながら、気持ち少な目に注ぎこむ。義樹はそれをまた一気に飲み干した。

グラスを置くと同時に、急に備え付けの時計の中から鳩が鳴きながら飛び出してきたのだ。何とも可愛らしい時計であり、どこか張りつめていた空気が緩んでしまう。

「もう開店時間だ。看板出してこないと」

洋は慌てて水が入ったポットを置き、入り口へと行ってしまった。あつという間に時は過ぎており、ようやく現実に取り戻される。

光二は椅子から腰を上げながら、鳩時計を興味津々に見ている義樹に尋ねた。

「俺、洋さんに迷惑かけちゃいけないと思うから、もう帰るけど、お前は？」

昼時は稼ぎ時でもある。そんな時間に中学生の男子に構ってられるほど、洋は余裕がないはずだ。もし義樹がわがままを言ったら、また無理矢理連れ出そうと思っていた。

「……そうだな、俺もそろそろ帰るよ」

「え？」

「何だ、その言い方。俺だって用くらいある」

正直その言葉は意外すぎた。いつも今起こっていることしか考えていないように見えた義樹が、自ら予定を入れているなんて、今までであったことだろうか。

「何の用だ？」

思わず恐る恐る聞く。義樹はグラスの中に入っている最後の一滴まで飲み込むと、口を開いた。

「——徹夜でやりかけたゲームが終わっていないんだよ」

「へ？」

「あのゲーム、面白すぎて止まらなくて、もう今すぐにもやりたいんだ！」

——少しでも真面目な考えをした俺が馬鹿だった。

見えないところで拳を固めつつ、己の苛立ちを押さえていた。

看板を出し終えた洋が戻ってくると、立ち上がっている二人を見て目をみはっている。

「あれ、帰るのかい？」

「はい。開店前には出る予定でしたので、ここら辺で」

「俺も午後から用があるから帰るわ！」

光二と義樹が次々と言っていくのを見ながら、洋は聞き入れた。

「わかった。たいしたもてなしできなくて、ごめんね」

「いえ、こちらこそ突然失礼しました。次は——」

「ねえ、洋さん、恵美香ちゃんたちは次の日曜にも来るの？」

すっかり調子が戻った義樹は一目惚れした相手の動向を探ろうとしている。一歩間違えれば、よろしくない方向に転がっているのは目に見ていた。

「正確な時間はわからないけど、日曜のだいたい午後三時くらいにはいると思うよ」

聞いた瞬間、義樹はガッツポーズを作りながら、光二の方に笑顔を向けた。

「よし、日曜の三時。光二、今度の日曜の三時にこの喫茶の近くのコンビニで集合な！」

「急に言うなよ、俺だって予定が……」

「ないんだろ。昨日言っていたのを覚えているぜ。『日曜は塾がないから家でのんびりできる』って」

そんなどうでもいいことは覚えているなんて、すごい奴だなと思いつつ、溜息を吐いた。

「……わかったよ。日曜な」

「よっしゃあ！ やべえ、今からわくわくしてきた。こんなに暑くても、夏を乗り切れそうだぜ！」

—— お前の方が熱くて、周りが我慢できないよ。
声にでそうになったが飲み込んで、光二の心の中にしっかりと留めておいた。

義樹が意気揚々と外に出ていくのを後に追いながら、軽く手を振って出る客を見届けている洋にぼつりと呟く。

「本当にお騒がせしました。そしてこれから、ごめんなさい」

「いいよ、僕は構わないから。またいらっしゃい」

「ありがとうございます。では、失礼します」

名残惜しつつも、また炎天下の道へと出ていった。

本当に外は暑い。だが、その暑さも何となくだがさっきよりも和らいだような気がしていた。

ほんの少し明日への楽しさが見つけられたようだった。

* * *

義樹と早々に別れて、光二は家に帰り、塾の予習をしてから、塾の講習に出るために夕方再び家を出た。

夏期講習——それは受験の天王山とも言える猛特訓講習である。

夏の始めであり、まだ部活動に所属している生徒を考慮しているため、夕方始まりであった。だが、日が経ち、八月の半ばになれば、一日超猛特訓講習という、一日拘束の日々がやってくる。これからは家と塾との往復の生活が待っていると思うと、少しは勉強が好きな光二でさえ憂鬱であった。

どうにか集中力を切らせないように数学の授業を二時間聞く。今日は関数の問題を解き、解答を聞いて、それをひたすらノートに写す。時に自力で正解まで持っていければ爽快であるが、ほとんどは

そうはいかないものだ。

ようやく数学の授業を終え、英語の授業までの休み時間、飲み物を買ったために近くのコンビニまで歩いているときに光二は思わず立ち止まった。見知った顔の少年が道路の反対側を歩いているのだ。

何かを考え込んでおり、そしてどこかうなだれている少年——義樹がいた。

どうしてこの時間に、そして何故ここにいるかとか、色々な疑問が一気に溢れる。その理由を聞くために、すぐにでも向こう側に渡ろうと横断歩道を探したが見つからなかった。

道路を横切るかと思ったが、車が何台も目の前を通っていき、渡るに渡れない。

ただ光二は義樹がどこかに行くかを見届けるしかできなかった。だがそれも時間が無情にも遮ってくる。

もう次の英語の授業の始まりだ。塾の友達に促されながら、義樹のことを横目で見つつ、しゅしゅと建物の中へと戻っていった。

第2話 搾りたてのジュースと共に (1)

光二と義樹が洋の喫茶店を訪れてから六日後、つまり次の日曜日、光二は塾で使っている英語のプリントなどを鞆に詰め込んで、待ち合わせ場所のコンビニへと向かった。

時計を見れば待ち合わせ時間の午後三時五分前、いつも十分以上遅れてくる義樹に対しては早すぎる到着だ。いつものことだとわかつているが、ついつい時間通りに来てしまう。とりあえず、コンビニの中で少し涼んでいくかと思い、自転車を止めようとした。

「おお、光二、時間ぎりぎりじゃないか！」

意外な声に動きを止める。そして視界の端から現れるくせ毛の人物を見て、啞然とした。義樹が入り口の脇で腕を組みながら立っているのだ。

ラフな格好は変わらないが、こんなに爽やかに現れる義樹は今までに見たことがなかった。

「さあ、行こうぜ。どうした、何ぼーっとしているんだ？」

「あ、いや、意外すぎて……。今日は雪か？」

「俺だつてやるときはやるんだよ。雪なんて降るかよ、こんな暑い日に。さあ、行け、喫茶楽園へ！」

「……ソレイユ・デ・レテだつて」

小さく突っ込んだが、まったく耳には入っていない。

——恋って、ここまで人を変えられるんだ。ある意味、勉強になる。

そう考えることで、義樹に対する変人扱いが少しだけ和らいだ気がする。平日は塾と予習と復習で終わるが、たまの休日くらい、こういうのもいいなと感じていた。

午後三時過ぎ——、喫茶店の前には二台の自転車が脇に並べられ

ていた。だが、二台の置かれ方は全然違っており、特にそのうちの一台は半分飛び出している。個性というものがそこに表れていた。鐘をカランカランと激しく鳴らしながら、義樹は元気よく入っていく。

「おはようございます！」

まるで教室に入る挨拶の仕方。額を手で押さえながら、光二は少し間を空けて続く。洋は嫌な表情一つせず、二人を出迎える。

「こんにちは、義樹君に光二君。今日も元気そうだね」

「もちろんさ！ 今週は今日という日を楽しみにしてきたんだから」
「そうか、それはとても嬉しいことだ。では、席に案内するね」

義樹が鼻歌をしながら、洋の後に着いていった。光二は他の客の様子を見ながら、恐る恐る踏み入れる。

まだあの少女たち——恵美香と水菜は来ていないようだ。

他には三人組の中年のおばさんたちと、女子高校生が二人。幸いなことに先週と顔ぶれは違っていた。

この前の義樹の姿はかなり引くものがあり、見られたものではない。だが今日はまだ許せる範囲の行動。この調子を維持しつつも、なるべくなら奇異な目で見られないようにするのが、義樹を扱う、最低限の目標だ。

改めて意気込みながら、光二は足早に案内された席へと座る。そこは先週と同じ場所で、机を二つ並べた四人席。上手い具合に、店内の席はすべて埋まった。

「へへ、光二、いつ来るかな、恵美香ちゃんたち」

一瞬、義樹の周りに花が飛んでいるかのように見える。だが、頭を横に振って我に戻ると、その幻覚はなくなっていた。頭を手に乗せて、肘を付きながら息を吐く。

「……本当にお前は幸せもんだよ」

「何が？」

「いや、別に……」

メニューを見ながら、今週こそ飲み物を頼もうと思ったとき、ま

た鐘の音が鳴った。そしてゆっくりとドアが開かれる。

「こんにちは、洋さん」

その声を聞いて、義樹は音を立てながら、椅子から立ち上がる。頬が仄かに赤い。ふらふらと歩いていきそうな彼を慌てて腕を引いて、座らせる。

「こんにちは、恵美香ちゃん、水菜ちゃん。えっと、実は今日も……」

「あら、また席がないんですか？ やっぱり日曜の午後は混むわね、水菜」

「二週連続か……。夏休みっていうのもあるかもしれないね」

恵美香と水菜ががつくりと肩をうなだれている。洋はちらっと光二と義樹の席を見た。そして彼女らに話しかける。

「四人席に座っている人を詰めてもらって、二人席を二つ作るって言うこともできるけど」

「え、本当ですか？」

「うん、ただ彼らに聞かないといけないけど。少し待っていてね」
恵美香と水菜を入り口付近で待たせて、洋は光二たちの元に近寄ってきた。今すぐにでも走り出しそうな義樹を必死に抑えつける。

「光二君、義樹君、あのね——」

「相席ですか！ いいですよ！」

「いや、そうではなくて、この席を分けたいんだけど、いいかな？」
「分ける？ まさか俺の恋路を——」

暴走し始めたところで、光二が無理矢理待ったをかける。

「あのな、二回目とはいえ、まだ初対面に近い。相席なんかできるか。少し席を離してもらって、近くにいただけでも十分だろ」

「けどよ……」

「ほらとつとと、奥の椅子に座れ。あの子に心の狭い嫌なやつだっと思われたいのか？」

「おい、光二、奥の席に移動しろ」

きりつとした表情に瞬間的に変化させて、義樹は光二に対して指

図してきた。不満はあったが、グラスとメニューを持って何も言わずに従う。洋は申し訳なさそうに机の一つを少し離れた。人が通れるくらいの距離を空け、台拭きでさっと水滴等を手際よくぬぐい去る。

だいたい準備が出来たところで、再び洋は二人の少女の元に向かった。

「お待たせ。席の方を作ったから大丈夫だよ」

「ありがとうございます、洋さん」

「いや、僕より快く承諾してくれた彼らに言っておいて」

恵美香が不思議に思いながら、作ってもらった席の方を見る。その視線と義樹の視線があった瞬間、卒倒でもするかと光二は思ったが、予想に反して彼は固まっていた。また変わった行動に思わずニヤけそっだ。

洋が二人を席に連れてくると、水菜が光二たちの方を見て、目を丸くする。

「あ、先週の二人組……」

「どうも。覚えてくれていたんですか」

「なかなか強烈な行動をしてくれたからね、一週間くらいじゃ忘れないわよ。先週はありがとう。おかげで色々とはかどったわ」

「いや、たいしたことはしていないから」

軽く話したところで、二人は座り、洋から渡されたメニューを見始める。

そして洋は振り返り、光二たちの方に向く。

「ご注文はお決まりですか？」

それを聞いて、慌てて義樹からメニューをひったくる。ざっと見て、値段的にお手頃であり、自分も飲むことができるものを目安に瞬時に見極めた。

「……カフェオレのアイスを一つ」

「はい、わかりました。そちらは？」

まだ動かない義樹を覗き込むように見る。そこで唐突に一週間前

の出来事を思い出す。

——金持ってきたかどうか確認するのを忘れた！

そのせいで、光二は恥ずかしい思いをしそうになったのだ。義樹のことだ、今回も懲りもせず所持金百五十円とか言うに決まっている。

「義樹君……？」

洋はあまりに反応がない義樹に対して、さすがに心配し始めたらしい。光二はとりあえず注文だけ済まそうと口を開いた。

「あとアイス——」

「オレンジジュース、一つ」

光二が驚くまもなく、洋は「わかりました」といって、その場を後にした。目の前には水を飲み干している少年。先ほどの固まりようは溶けたらしい。金はあるのかと聞こうと思ったが、すぐ傍には義樹が気になっている娘がいる。さすがに可哀想かと思い、聞くのは控えた。

少女たちも注文を頼み終わると、何ともいえない緊張が走る。

義樹は何もしゃべらず、ただ水をちびちび飲んだり、手持ち無沙汰にメニューを見たりしている。今までとは真逆の消極的な行動に光二はただ啞然とするばかり。

隣では少女たちが楽しそうに話をしている。何だか空気が違ってきて、羨ましく思えた。

「光二君、何だか疲れたような顔をしているけど、大丈夫？」

洋が氷と中身を上手い具合に配分させたアイスカフェオレを光二の前に置いた。義樹には爽やかに彩っている搾りたてのオレンジジュースを。

「人のテンションに左右されていたら、少し疲れてきて」

「それは大変なことだ。まあ、ある程度自分のペースは守った方がいいと思うよ」

「ご忠告、ありがとうございます。あ、英語の勉強、見てくれますか？」

洋はちらつと店内の客の様子を見た。他の人のグラスはまだ半分以上飲み物が入っている。

「大丈夫だよ。恵美香ちゃんたちの飲み物を持ってきた後なら」

「わかりました、お願いします」

洋に言われたとおり、義樹のことなど放っておいて、自分のことをしようと思い、鞆の中から塾のプリントを取り出した。長文読解のプリントと文法のテキスト。授業はこれを平行してやりつつ、終わる前に単語テスト。ひたすらその繰り返し。まだ二週間も経っていないが、飽きそうになっていた。

気が付くと、隣で水菜がオレンジ色のテキストを見つめている。そんなに物珍しいものなのだろうか。

「何か？」

思わずぶつきらばうに聞いてしまふ。水菜はテキストをまじまじ見ながら、言葉を漏らす。

「そのテキストに書いてあるマーク……、あなたもしかしてイースト進学塾に通っているの？」

中央に大きく描かれているマークから塾の名を指摘されて、目を丸くする。

「そうだけど。どうしてそうわかるんだ？」

「それはわかるわよ、私もその塾に通っているから」

「え？」

「コースは違うみたいだけどね。私はただの選抜コース、特別選抜コースじゃなくて」

一気に入り込んでくる情報に、光二は一瞬困惑した。

イースト進学塾はこの地区では昔からあり、有名で実績もある塾だ。こちら辺で塾に行くとなったら、その塾か他にある大手の二つぐらいである。

だから同じ塾など、驚くべきことではないのだが、引つかかるところは別にあった。

「どうしてコースまでわかるんだ？」

テキストには特に明示されている部分はないはずである。だが水菜は不思議そうに首を傾げた。

「知らないの？ コースによって、テキストの色、違うのよ。特別選抜コースはオレンジ色、選抜コースは黄緑色だって。自分の周りしか見えていないなんて、少し観察力がなさすぎるわよ、高山光二君」

「へ？」

突然言われた光二のフルネームに、思わず間抜けそうに口をぽかんと開けてしまう。それを見ると水菜はくすつと笑った。

「どうしてそれを……」

「さつき裏表紙に書いてある名前が見えたのよ。本当に自分のことに関しては抜けているのね。あんなに理科は優秀なくせに。——私は鈴原水菜。英語が不得意なイースト進学塾に通っている受験生。それはもう笑える程に成績悪くて。だから、洋さんに教えてもらっているの。ねえ、洋さん？」

お盆にアイスティーとミルクティーを乗せた青年に呼びかける。

洋はすぐに状況を理解し、軽く頷いた。

「ああ、そうだよ。主に水菜ちゃんに英語を教えているんだ。恵美香ちゃんは、英語が得意だし、理解が早いからね。教えることがなくなってしまうよ」

「それって間接的に、私の頭が悪いつてことじゃない」

水菜がふてくされながら、洋に返答する。それを謝り、受け流しながら、飲み物を置いていく。

「ねえ、そちらの彼女もイースト進学塾なの？」

光二は視線を水菜から恵美香へと持っていく。すっかり勢いをなくしてしまった義樹に対して、少し刺激を与えようと敢えて振ってみたのだ。

恵美香はおっとりとした様子で柔らかに受け答える。

「いいえ、私は塾には通っていないわ。家庭教師をつけてもらっているの」

「へえ、家庭教師か。大切に育てられているんだね。さぞ素敵なご両親で。……ちなみにお名前は？」

「私？ 私は池中恵美香。初めまして」

柔和な笑顔で挨拶をした。その声に反応して義樹が視線をちらっと上げる。

「ねえ、そちらの素敵な彼もよければお名前を伺ってもいいかしら？」

義樹はそう聞かれると、がらりと雰囲気を変えた。意を決したように顔を上げると、口を大きく開いた。

「俺の名前は松原義樹。——恵美香ちゃん、あなたのような素敵な人と出会えて光栄です！ よろしければ今後仲良くさせていただけませんか？」

義樹が丁寧すぎる言葉を使いつつ口説いているのを見て、光二は呆然としていた。すぐ側にいた洋も若干驚いている。

——本当にキャラ変わりすぎだろう！ ていうか、初めての言葉でそんなに核心突いていいのか！

だが彼女は嫌な顔一つせず、天使のように微笑んだ。

「ええ、いいわよ。よろしくね、義樹君」

店内はどこか陽気な感じの音楽が流れている。

そして搾りたてのオレンジジュースに浮かんでいる弾けた粒のように、義樹は嬉しさを顔の全面に出した。

第2話 搾りたてのジュースと共に (2)

「ちょっと、恵美香！」

二人によつて作りだされた独特の雰囲気、置いていかれている一人の水菜は、目の前のおっとりとした少女に呼びかける。

「何かしら、水菜」

「こんな得体の知れないやつに何を言っているの！ そんなこと言ったら、いつまでも着いてくるわよ、それこそストーリーカーみた」

「ええ？ 彼はそんなことしないわ」

「どうしてそんなこと言えるの。保証がないじゃない！」

「はつきりと確証がないから、そう取られてしまつかもしれないけど……。私の直感よ。まあもし私にとって嫌なことをしてきても、大丈夫。ね、水菜？」

少し含みのある笑みを浮かべる。それを見た水菜は何か思い当たりのあるのか、渋々と口を開くのをやめた。そして肩をすくませて一息吐く。その仕草はどこか共感できるものがあつた。

今の恵美香と水菜のやりとりで何となく二人の関係が垣間見た気がした。押しが強そうに見える水菜だが、本当は恵美香の方が強いのではないか。そしてそれを強引に押し切られ、仕方なく賛同せざるを得ない状態になり、溜息を吐く――。どこか光二自身と義樹を見ている気がしてならなかつた。

「ねえ、恵美香ちゃんたちってどこの学校？」

「そついう義樹君たちは？」

「俺たちはね……」

意外にもすつかり意気投合してしまった二人は、脇に置いておくことにした。どこかやり切れない状態であつた水菜も、その二人に付き合うことはやめて、光二の方に視線を向けている。

光二は長文のプリントを広げて、とある英文を洋に示した。

「この訳し方がよくわからないんだけど、何かポイントとかあるか

な？」

「どれどれ……」

洋は赤字が入ったプリントを持ち上げて、英文に目を通し始めた。英文学科を卒業した彼にとっては、簡単なものだろう。もしかしたら簡単過ぎて彼は光二のことを馬鹿にしているかもしれない。内心かなり心配であつた。

特別選抜とはいえ、英語に限っては下の方。本当にこの教科が悪いだけで、下のコースに行った方がいいのでは、と担任の先生、もとい英語の先生に言われるのだった。

洋はざっと英文を見渡すと、少しだけ考え込んだ。

「これは……関係代名詞が上手く訳せなかったようだね。あとは語彙が正確に覚えられていない。だからこういう風にちぐはぐな意味合いになっているんだ」

「そうですか……」

「関係代名詞とかはまだよくわからない時期だと思う。でもこれは高校、そして大学受験でも絶対に使うから、今のうちにある程度基礎を作っておけば、必ず後々に生きる。今は焦らず、一つずつ消化していこう」

「ありがとうございます、洋さん」

どこか心が温かくなるような言葉だった。ただの助言だけではない、しっかりと次を見据えた言葉。塾の先生に嫌みったらしく指摘された問題とはいえ、それはそれなりに意味があるものなのかもしれない。

その後、光二は一週間分の問題でわからなかったところを次々と洋に質問していった。同じく洋に質問をしにきた水菜と共に。わかりにくかった問題を丁寧に教えつつ、語句のわかりやすい覚え方などを楽しく教えてくれる。

途中で洋が喫茶の業務に戻っているときは、水菜と一緒にお互いのテキストを見比べたりもした。

そして義樹との話がひと段落したのか、恵美香も混じってくる。

つまらなそうな顔をしている義樹もいつしか洋の言葉に耳を傾けていた。勉強なんて嫌い、と断言している彼がそのようにしているのは非常に珍しい。それほど魅力的な説明なのだろう。

「どうもありがとうございます。またお越しくださいます」

洋が客に挨拶をしているのを聞いて、光二はちらっと店内を見守っている鳩時計に目をやった。もう午後五時過ぎだ。いつのまにこんなに時間が経っていたとは。

「今日はいつもより時間の進みが早い。結構話は聞いたけど、質問したいことはまだたくさんあるなんて……」

水菜がげんがりしながら、恨めしそうに英語のテキストに目を落とす。光二の方が多く質問してしまったため、そのような差が付いてしまったのだ。

洋は残っていた他の客を見送って、時計と外の様子を見ながら、光二たちの元に近寄ってきた。どこか神妙な顔つきで、かしこまっている。

「ねえ、少し時間はあるかな？　もしよければ君たちに味見をしてほしいものがあるんだ。授業料の代わりと言ったら変だけど、感想を聞かせてほしい」

「味見？　もちろん食べる、食べる！」

真っ先に声を上げたのは言うまでもなく義樹。手を挙げながらはつらつと返事をした。それを聞いた洋はどこかほっとした顔つきになる。

「ありがとう。せつかくの時間にごめんね」

「そんなこと言わないでくださいよ。私たちが無理言って頼んでいくことだし。洋さん自信のことを優先してください」

「水菜の言う通りですよ。何だか小腹も空いてきちゃったし、是非頂きたいです」

「私も」

少女たちはあどけない顔でクスツと笑いながら、お互いの顔を見合わせた。恵美香の言うことももっともだ。急に緊張の糸が切れて

しまったため、同時にお腹も一気に空いてしまった。

洋はカウンターの中へ戻り、冷蔵庫から小さな皿を二つ取り出した。それをしっかりと持ちながら運んでくる。そして机の上にそっと置いた。

その皿の上にあつたのはごんまりとまとめられた、掌に乗りそうなくらいの四角いケーキ。

全体はチョコレートムースで覆われており、上にはチョコレートのカケラが刺さっている。そしてケーキの周りにもチョコソースが滑らかな曲線を描いていた。

「……チョコレートケーキ……だよなあ」

義樹が思わず息をのむ。すぐにフォークを突き刺しもせず、見つめていた。

この喫茶店には飲みもの以外にもデザートとしてケーキも売られている。だがそれはホールで作られたのを切り分けたものであり、チーズケーキやタルト、シフォンケーキなどが主であった。個々に作られているものはないため、この場に出てくるのは何だか不思議である。

「これ、洋さんが作ったんですか？」

同じく見惚れている少女たちをよそに光二は思ったことを口にする。

「そつだよ。自分の店に他の人が作ったケーキを置くかい？」

「いや……それにしてもすごいなと思って」

普通の喫茶店で売られているレベルではないだろう。少し高めか、それ以上のケーキ専門店で売られている程かもしれない。

洋はケーキを目の前にして手を動かさない中学生たちに、困惑しながら言葉を漏らす。

「外見をじっくり見てもらうのも、それはそれで嬉しいけど、やっぱり味で判断してほしいんだ。だから、早く他のお客さんが来る前に食べてほしい」

どこか時間を気にしていたのはそのせいでもあつたのか。だがそ

れなら尚更疑問が残る。

「俺たちでいいんですか？ これって試食ですよ、いわゆる。それならもつと味がわかる大人に――」

「今回のケーキは子供、特に思春期くらいを対象に考えて作ったんだ。甘さとか中身を気にして。だから君たちの意見が欲しい。ただこの状況を他の人に見られると、少し居心地が悪いからね。――さあ、食べて。本当に率直な感想でいいから」

急かされるように、四人はフォークを手に持ってケーキに刺した。そして一口程度に切り、口の中へと入れる。

入れた瞬間、チョコレートの甘さでいっぱいになった。まるやかな口どけ、柔らかなスポンジ、絶妙な甘さなど、一口だけでもかなり味わうがいがある。

「美味しい……。そこら辺のチョコレートケーキと違って、とても濃厚だわ」

「チョコ系って、どうも甘さとか苦さとか微妙なことがあるけど、これはちょうどいいって感じ」

恵美香と水菜が次々と率直な感想を口にしていく。それを洋はいつになく真剣な顔で聞き取っている。一同は二口目、三口目と続けていく。同時に光二にも視線が注がれているのに気づいた。それに促されて慌てて感想を出す。

「な、何て言うか、とろける感じだよな、このムースとか」

普通のチョコレートケーキとは言わず、むしろムースと言った方が正しいのかもしれない。

肯定的な意見を聞いた洋はいささか安堵したように見えた。試作品を人に出すのはとても度胸のいることだろう。しかも自分とは違う年代を対象にしているのなら、一層そうだ。

だがよく考えると、一人だけケーキを口にしてから、何も言葉を発していない人物がいるのを思い出す。光二は前に座っている少年をちら見した。

「義樹君、どうかな？」

洋も光二が見たのと同時に意見を求める。だが義樹は何口か食べた後はフォークを持ったままだ。

それはまたしてもかなり珍しい様子だった。何に対してもがつく少年が大人しくしているとは。義樹は首を傾げながら、ケーキを指す。

「……俺、ケーキは好きだ。チョコレートケーキも好きだ。けどこのケーキ、何かが違う」

「え？」

知らずに光二はポロリと言う。

「美味しいと思う。でも少し甘すぎね？」

「義樹君、そんなに甘いかしら。とてもいい具合だと思うわ。紅茶と一緒に食べたらきつと合うわよ」

「恵美香ちゃん、そうかもしれないけど、俺は紅茶とかほとんど飲まないぜ。飲まないものを進められても何だかなと思うけど」

光二にとって今の言葉はかなり意表を突かれた。確かに紅茶には合うが、オレンジジュースや甘いジュースには合わない可能性がある。敢えて対象を考えたとなると、若干の疑問点が残るだろう。

「……ありがとう、義樹君。これだとただの大人相手のケーキだね」

洋は少し寂しそうな顔で口ごもる。どうやら彼が求めていたものと何かが違っていたらしい。だがそれでも間違いないと言えるものがあった。

「けど洋さん、美味しいよ、このケーキ。だから、もっと食べたい！」

けるつと図々しいことを言う義樹に、一同はずっこけそうになった。洋は苦笑いをしながら、口を濁す。

「ごめんね、それだけしか作っていないんだ。試作品だから、あまり数は作らないからね」

「そんな……。なあ光二、あとどれだけ食べる？」

義樹は子犬のような目で光二を見つめてくる。

——そんな目をされたら白旗を揚げるしかできないだろう！

「……いいよ、残り全部食べろよ」

「ありがと！ さすが、よくわかってるな！」

「……嫌でもわかる」

そして意気揚々と義樹は残りのケーキを食べ始める。さすがの彼も少女たちの方には手を付ける気はないらしく、特に恨めしそうに見てはいなかった。その隙に恵美香と水菜も残りをぺろりと食べ上げる。

やがて、空になった皿を洋が手にしようとしたとき、喫茶店の入り口のベルが、鳴り響いた。

第2話 搾りたてのジュースと共に (3)

喫茶店の中に入ってきたのは、くたびれたスーツを着た少し頬がこけている青年。髪はぼさぼさで、背筋は曲がり、全体的に疲れきっている印象を受け、せつかくの二枚目が台無しである。営業途中の青年だろうか、手持ちの黒い鞆から何かのパンプレットが目に入った。

「いらつしゃいませ、お一人様ですね。こちらのお席へのどうぞ」
洋は颯爽と近寄り、入り口近くだかなるべく奥まった二人席にその青年を案内した。光二たちとは真逆の場所。そこは少しだけ孤立したような所で、一人で何かを没頭したいときにはお勧めの場所であった。

青年はぼんやりとメニューを眺めている。そして水を持って、注文を取りに来た洋にただぼそと「コーヒー」とだけ言う。洋は軽く返事をして、彼の空間を壊さないように引き下がった。

義樹がその青年に対して意識を向けているのに気づき、声をひそめて慌てて中断させる。

「義樹、そんなにじろじろ見たら失礼だろう」
だが義樹はきょとんとした顔をする。

「え？ そんなに見ていたか？」

「かなりな。……さて、リフレッシュも済んだところで、勉強の続きをしようか、鈴原、池中」

口直しとして、水を飲んでいる水菜は視線が合うと頷く。だが恵美香はただ真っ直ぐ、あの青年の方を見ていた。

「池中……？」

「な、何かしら、高山君」

再び呼ぶと、すぐにはつとして振り向き、聞き返す。どれだけ彼女は彼に対して集中していたのだろうか。そんなに珍しい人だろうかとも思ってしまう。

今の時代、不景気というのはテレビでも新聞でも嫌でも聞かされている。そんな中、営業で確約が取れず、足が棒になるまで歩き回っている話もよく聞く話だ。

もしかしたらこの少女は雰囲気からしてお嬢様のように、どこか世間離れしているのかもしれないと、何となく思った。

四人の意識を再び英語の問題に戻す。水菜は洋に質問をするための問題を探し、光二は質問したところを自分なりにまとめ始めた。恵美香も光二の長文プリントをさらっと読んでいるようだ。

だが義樹はまたつまらなそうに、ぼんやりと三人の様子を眺めている。ある問題文を見て、ふと口を開けた。

「『私は非常に上手なサッカー選手だ』って、自分で上手いって言うかよ」

「これはただの問題だから、そんなに突っ込むなよ。もしかしたら私じゃなくて彼にしたかったのかもしれないし」

「どうせ適当に考えた問題だろ。ただ思っただけさ」

水をごくごく飲みながら、ふうつと息を吐く。水菜はペンを動かすのを止めて、そんな義樹を見た。

「さつき、恵美香との会話から聞こえたんだけど、二人ともサッカー部だったんだって？」

「そうだよ。俺はフォワードで、光二はミッドフィルダー。そういえば二人は何の部活に入っているんだ？」

「私たちはテニス部。まあ、もう引退した身だけどね。今となつては過去の話。顧問の先生が適当だったから、成績っていう成績は出せなかったけど、それなりに楽しかった」

「上位の選手を見て、何か思わなかったのか？」

珍しく義樹が話題に噛みついていて、混じりけのない目で。水菜も若干嫌っていた彼だが、何かを感じ取ったのか真面目に受け答える。

「まあ、上手いな……って思った。同じ中学生のはずなのに、どうしてこんなにも差が出るのかって」

「そうだよな、やっぱりそう思うよな。別にクラブチームとか入っているわけでもないのに、どうしてこんなに勝ち負けがはっきりするのかって……」

拳をぎゅっと握りしめ何かに耐えているような義樹。それを見て、ほんの一、二週間前のことを思い出す。

義樹と光二の中学のサッカー部は夏の県予選二回戦で惜しくも敗れてしまった。戦力はそれなりに揃っており、もう少し勝ち進むと算段していたが、ほんの少しの隙にゴールを入れられてしまい、それが決勝点となってしまったのだ。

三年生にとっては引退試合。あまりの悔しさに涙を流す部員もいた。だが一方で、部長であった義樹はピッチに立ち、夕日をずっと見つめていた。泣くの中でも喚くのではなく、ただ溢れでる想いを、夕日の中に無理矢理とけ込ませようとしているようにも感じられた。あれからあつと言う間に日は過ぎている。一日経つにつれて、光二の中では一つの出来事であったその試合は、確実に過去へと移行していた。

それよりも、漠然とした不安の方が光二の心の中を覆っている。この先の将来という、避けても避けられない出来事が――。

そんな思考を中断させるように、コーヒーカップが音を立てて、皿に置かれる音が店内に響く。激しい音に思わず光二でさえ、視線をあの青年の方に向けていた。

青年は左手で額を押さえながら、深く溜息を吐いている。時折、小刻みに首を横に振っていた。何か嫌なことを思い出したのかもしれない。激しく己に叱咤している。

そんな中、洋は温かなコーヒーカップをお盆に乗せて、その青年に近づく。青年は洋の気配に気づき、胡乱下に視線を上げた。

「コーヒーのお代わりがありますか、いかがですか？」

「……注文した覚えはない」

「サービスです。お気になさらずに」

そっと空になったコーヒークップを引き下げ、代わりに湯気が立

っているカップを置く。青年はその様子をただ眺めていたが、洋と視線が合うと、目を大きく見開いた。

「お、お前……！」

「何でしょうか。顔に何か付いていますか？」

青年は上から下まで洋を見たが、落胆したように軽く首を横に振った。

「いや……気のせいだ。何でもない。……この喫茶店はあなたが始めたのですか？」

「いえ、違います。知り合いがここを経営している際、縁あって出会い、事情が重なって引き継いでいます」

「そうか。その歳なのにコーヒーもしっかり淹れられていて、美味しいですよ」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。ではごゆっくりと」

洋は微笑み、軽く頭を下げると、優雅にその青年の前から去っていった。青年は再びメニューの方に視線を向けると、何やら手帳を取り出して、ペンを走らせる。そしてそれが終わるとコーヒーを一口喉に通した。

洋の言動などの優しさや気の使い方が、たったそれだけの出来事でさえも伝わってくる。女性から見たら、非常に魅力的なのだろうな、と漠然と光二は思った。

しばらくして青年はコーヒーを飲み終わると、支払いを済ませる。そして入ってきたよりも背筋を真っ直ぐにして出ていった。何だか少しか彼の意識に変化が生じたようだ。

気が付くと、また鳩時計が時間を知らせている。そして洋も外から何かを入れ込んでいる。水菜は鳩時計を見ると、あっと声を漏らした。そしてまだペンを握ったままの光二に呼びかけてくる。

「もう午後六時、閉店の時間よ」

「そんな時間？ 早いな、もう三時間も経ったのか」

「そうね、質問の量がいつもの倍以上だもの。時間は短く感じるよ。さて、もう帰りましょうか。たまの日曜の夜くらい、早く帰って夕

食にした方がいいでしょう」

髪を揺らしながら、水菜は立ち上がる。恵美香もすでに準備は終えていた。そして彼女は呆けている義樹に笑みを浮かべた。

「義樹君もさあ、帰りましょう」

「え、もう、帰っちゃうの！」

「閉店時間なのよ、しょうがないわ」

「そんな、洋さん、少しくらい……駄目？」

立て掛けの看板を取り込んだ洋にすぐるような声を出す。彼は特に顔色など変えずに返す。

「別に僕は構わないよ。ディナーはやっていないから、この時間に閉めるだけだしね」

「本当？ それなら恵美香ちゃん、もう少しだけ——」

「義樹君」

いつものおっとりした声ではなくはつきりとした口調をする。そして義樹の右手を両手で握りしめた。

「洋さんだって、この後に色々と用があるからこの時間に閉めるのよ。……ね？」

「う、うん……、そ、そうだね。帰ろうか、光二」

義樹は若干顔をひきつらせながら、たどたどしく返事をした。一方、恵美香は至って笑顔である。不思議に思いつつも、全てのテキストとプリントを鞆の中に入れた。

「ごめんね、何だか追い出したようで……」

「いいんですよ、別に。気にしないでください。こちらこそ、こんなに長々とすみません。そしてありがとうございます」

謝罪より、感謝。それを声に出すことで、洋はまた嬉しそうに笑ってくれた。

四人は支払いをしてドアを開けると、少しねっとりとした風が肌にまとわりついてくる。もうすぐ夜になるうという時間、夕焼けはもうほとんど見えなくなっていた。

「またいつでもおいで」

義樹と光二、そして水菜が自転車に手を添える。

「……来週も一緒に勉強してもいいか？」

光二はちらりと水菜を見る。彼女は首を縦に振った。

「いいわよ。来週も勉強しましょう。あのさ、よかつたら理科も教えてくれない？」

「俺が？」

光二は指を自分に向けて、驚いた顔をした。

「ええ。だって、あなた塾で一番理科できるじゃない。いつも模試で一位だし」

「ああ、そうだったかもしれないな。……別にいいが、俺でいいのか？ 教えるとか得意じゃないけど？」

光二にとって理科は得意というよりも、好きな教科だ。ささいなことでも授業中に実験をしてくれた中学校の理科の教師のおかげだろう。とは言っても、好きであるからといって、教えることに適しているとは言えない。

しかし水菜はくすつと笑いながら、口を開いた。

「いいのよ、理科が好きなあなただからいいの」

一瞬、その言い方にどきつとした。何やら意味深に捉えられる言い方だが、言った本人はすでに何事もなかったかのように洋に挨拶をしている。その横顔を見て、光二の記憶の中でまた何かが引かかる。頭の中がもやもやとした、漠然としたところが。

義樹は最後まで名残惜しそうだったが、恵美香たちが先に帰路に着くのを見て、渋々と喫茶店から離れた。彼女たちは光二たちと真逆の方向に家があるらしく、すぐに別れることとなる。来週も同じ時間でと約束して、背をお互いに向けた。そして水菜は自転車を押しながら、徒歩の恵美香に合わせ、光二たちは自転車に乗り始めたのだ。

見る見るうちに二人の姿や喫茶店は小さくなる。隣では溜息を吐きつつも、嬉しそうな顔の義樹が意気揚々と自転車を走らせていた。「恵美香ちゃん、色々可愛いねえ！」

「そうだな。充実した半日だった」

「勉強とかなしで行きたいんだけど……」

「そんな暇はない。行くなら一人で行け。お前、学校からの宿題、まだ手を付けていないだろ。早くやったほうがいい。あれは一週間かけても終わる気がしない」

「そんなにあるのかよ！ それなら光二のノートを――」

「絶対に見せない」

言う前にそれを防ぐ。義樹は変なところで頭が回転するから、無駄口は開けない。

やがて適度なところで義樹と別れ、家に向けて走らせる。楽しかったという気持ちと、また塾と家との往復が始まると思うと気分が重い。

そして明日から一週間は一日缶詰講習が始まる。気分を萎えるなと言われても、無理な話だった。

第3話 挟まれる想い（1）

恵美香、水菜、そして洋と楽しく談笑した翌日は、光二にとって文字通り怒濤の日々が過ぎて行つた。夏期講習の第二期は、五教科を二時間ずつ毎日こなすカリキュラム。脳内に膨大な内容を叩き込むのはかなりきつい、演習の時間帯にはそれを上手く活用するようになければならず、頭をフル回転させなければならない。そのため授業に付いていくのは、かなり必死であつた。

何時間にも及ぶ授業によつて、疲労のために睡魔に襲われることも多々あり、先生や友達に起こされたこともある。家に帰つたらすぐにベッドに飛び込みたいが、その誘惑を振り切つて宿題をやるために椅子に座り込む。

そんな日々が六日続き、ようやく講習のない日曜になつた。さらに嬉しいことに、盆ということで塾自体も休みとなり、講習から解放される束の間の夏休みを得ている。

久々に光二は時間を気にせず起きると、すでに昼近く。居間に行つてみると、両親はどこかに買い物に出ており、昼は適当に食べていて、というメモが残されていた。

欠伸をしながら、冷蔵庫を覗いてみる。昨晚のご飯の残り、そして冷凍食品が少しあるだけ。光二の食欲をそそるものはない。溜息を吐きながら、ドアを閉じる。

「出かけるなら、もう少し何か置いていってくれよ」

近くのコンビニで何か出来合いのものを買つてきて、お金でも請求しようかと考える。

おにぎり、サンドイッチ、パスタ、丼もの——、そんなことを考えていると、ふとあることを思いつく。

出来合いのものなら、温かく、美味しいものがいかに決まっている。だがチェーン店の丼ものは、すでに塾の講習中に食べ尽くしている。ならば——と思い、腹の減り具合と相談した。まだ我慢でき

る範囲だ。

思い立ったら、義樹程ではないが行動は早い。着替えを済ませ必要なものを持って、家を出る。そして自転車に飛び乗って、ペダルを漕ぎ始めた。

目的地に着いた頃はちょうどランチタイムの真最中であつた。

街の片隅にある喫茶店ソレイユ・デ・レテの店の前では数少ない駐車場はすべて埋まり、自転車も何台か置いてある。それなりに混んでいるようだ。

珍しく後先考えずに行動したことを若干後悔しつつも、扉を押して、中に入った。

心地よい音楽が耳に入ってくる。中を見渡せば案の定、席は埋まつていた。椅子に座って待っている客はいないが、待つのは避けられなさそうだ。

「いらつしゃいませ。……あれ、光二君？　こんな時間帯から来るのは初めてだね」

洋が空のお盆を片手に笑顔で出迎えてくれる。光二は少し照れくさそうに返事をした。

「初めてですね。ちょっとお昼をここで食べてみようかと思って」

「それは嬉しいことを。ありがとう。けどこの通り満席だから、少し待つことになるけど……」

「あら、高山君？」

後ろから、可愛らしい声が耳に飛び込んでくる。目を丸くして振り返り、ウェーブがかかった髪の少女を見た。

「どうしたの、こんな時間に」

「池中じゃないか。それはこっちが聞きたい」

恵美香の出現に驚きを露わにする。彼女は店の一角に目をやった。その先には水菜がストローでアイステイーを吸っている。

「今日は早く来たのよ。私、午後から親戚の家に行くから、その前に会おうって約束していて。もしかして席をお探し？ それなら私も帰るから、その席にどうぞ座って。あ、でも、義樹君が来るとなると……」

「いや、あいつは来るなら先週と同じ時間くらいだから、一席で大丈夫」

慌てて首を横に振り、義樹の存在を否定する。だがそれ以上に、何故か鼓動が速くなっているのに気になった。

「それなら水菜と一緒にどうぞ。あの子、まだ洋さんに質問があるからここにいますわ。あら、何か嫌なことでも？」

恵美香が不思議そうな顔で光二の顔を覗きこんできた。あのくりくりした魅力的な瞳が、すぐ目の前にある。視線を少し逸らしながら返した。

「そ、そうじゃなくて、これじゃあ俺が追いだしたみたいに見られる」

「そうかしら。人によってはそうは捉えないかもしれないわ。水菜に話をしてくれるわね」

そう言って、恵美香は白い歯をこぼした。そして軽やかな足取りで水菜の元へと赴く。洋はいつのまにかに仕事の方に戻っており、入り口には光二だけが残ることとなる。

恵美香が椅子に座り、水菜に声をかけた。そして話をしている最中に、光二の方を見たりする。水菜はこっちの方を見ると、ぎよっとしていた。そして何やら焦ったように、恵美香に口を開く。快活な音楽が流れているため、聞き取ることとはできないが、どこかそわそわしているように見える。

だが、一方で光二も若干顔が堅くなっていた。思いもよらぬ展開に、上手く頭が回らない。本当はただひっそりと洋のサンドイッチなどを食べようと思っただけなのだが。

恵美香が椅子を引く音がした。お金を机に置き、ピンク色のバックを持ちながら、笑顔で水菜に手を振っている。半分腰を上げてい

た水菜だが、やがて肩をすくめながら、深く座りなおした。

そして入り口近くで待っていた光二に近寄ってくる。

「水菜、相席歓迎するって」

「そうは見えなかったが……」

「照れているだけだから。私、たぶん来週も来れないから、義樹君に伝えておいてくれる？」

「俺、今日も盆の間もあいつと会う予定はないんだけど。洋さんに伝えた方が確実だと思うよ」

「そうかもしれないけど、洋さんに余計な負担を掛けたくないの」「負担？」

思わず疑問を口走ったとき、恵美香の顔に哀愁が漂っていた。何も聞かずに、ただ黙って飲み込んで欲しいと懇願しているように受け取れる。

「恵美香ちゃん、もう帰るのかい？」

洋が皿を下げた合間に寄ってきた。恵美香はくるりと振り返り、表情を変えて微笑んだ。

「ええ、時間なので。ごちそうさまでした。また、遊びに来ますね」「ありがとう。気をつけて行ってらっしゃい」

軽く頷くと、光二の横を通り過ぎて、店から出ていった。

そのドアが閉じかけているとき、外の風景が見えた。思わずそのまま飛び出したい衝動に駆られたが、光二のための水を持った洋がそれをやんわりと阻止する。

「光二君、席にどうぞ」

「は、はあ。でも……」

「すぐにコップを片づけるから」

「……わかりました」

笑顔で促されるままに、光二は水菜が座っている机に連れてこられた。彼女は苦笑いしながら、光二を出迎える。

「こんにちは。元気そうね」

「どうも。……席、失礼します」

椅子に座ると、まだ仄かに温もりが残っていた。彼女たちはここで楽しく話をしていたのだろう。水菜は挨拶をした後は、手帳を開いて日程を確認したりしており、光二に対して特に気にしなく行動している。

その様子を横目で見つつも、洋が空いている皿を片づけている間に、光二はメニューを開き、注文するものを選んだ。サンドイッチが数種類しかないが、どれも惹きつけられるものがある。

とりあえず一番上に載っている？本日のサンドイッチ？を注文した。前が立て込んでいるため、時間がかかるらしい。その間、水を飲んだりしながら、時間を潰していた。

いつも学校でもマイペースに過ごすことが多いので、始めは気にならなかったが、次第に何となくだが苛立ちを感じ始める。

おそらく水菜のせいだろう。彼女は極力視線を合わそうとしない。そして光二などいないかのように振る舞っている。さすがの光二も、その様子に見かねて口を開いた。

「……何か、俺が悪いことでもしたか？」

「していないけど」

「じゃあ、どうして避ける」

「避けていない。気のせいよ」

「そうは見えない。……まったくよ、そこまでしてくれると若干不愉快極まりないんだけど」

ふてくされながら、直球で水菜に正直な感想を述べた。こう言えば、彼女は何かを感じ取ってくれると期待をしたからだ。

水菜は目を伏せながら、仄かに頬を赤くしながら、声量を抑えた。「……思春期の二人が男女でいたら、何か噂がたった時、面倒じゃない」

それを聞いて、光二は目が点になった。まさかそんなことを気にしていたとは。

急に沸き上がってきた想いがどうにも耐えきれなく、笑い飛ばした。

水菜は光二の態度を見て、むっとする。

「何よ、その反応はないじゃない！」

「い、いや、今時そんなことを気にしている中学生なんているのか
と思っただけさ」

「悪いわけ？　こちら辺、私の中学のクラスメートも住んでいるの
よ。女子はいいけど、男子とかに見られたらたまったものじゃない」
確かにその言い分もわからなくないが、そこまで過剰反応するの
はどうかと、光二は首を傾げそうだ。

「けどさ、例え見られたとしても、そいつらやクラスの友達と会う
予定はあるの？」

「月末に文化祭の出し物の準備が……」

「月末っていうことは、あと二週間後くらいだろ。そんな昔のこと、
話にあげる連中いるのか？」

「人って嗜好きなのよ」

「それに別に会ったら会ったで、言い訳考えればいいだろ。従兄と
か、相席せざるを得なかったとか、いくらでもあるだろ」

「そうだけど……」

宥めても、意見を言っても、まだ何か反論を探そうとする。諦め
が悪い、すぐに表情に感情が表れる――。そんな彼女を見ていると、
光二の頭の中では誰かを思いだそうと躍起になっていた。過去に別
れを余儀なくされた、幼い頃の思い出から。

しばらく沈黙が続いた中で、洋がタイミングよくサンドイッチを
運んできた。黙り込んでいる二人を見て、きよとんとしている。

「あれ、実はまだ二人はそんなに仲良くなかったの？　先週、とて
も意気投合して話をしていたから、気が合うのかと思った」

「いえ、ただ単に鈴原が照れ屋なだけです。洋さん、何か面倒なこ
とになったら、ちゃんと証人になって下さいね」

「わかったよ」

優しい笑みを浮かべながら、しっかりと返事をする。それを聞いて、
やっと意地を張るのをやめたのか、水菜は視線を上げて、光二

に合わせた。

「すみませんね、照れ屋で。洋さん、お水のお代わり、お願いします」

「はい、今、持ってくるね」

アイステイーが入っていた空のグラスを下げ、席を離れる。

一方、光二は目の前に現れた、美味しそうなサンドイッチに目を輝かせた。当たり前であるが、コンビニで売っているものとは違い、出来立てで、いい匂いが漂ってくる。新鮮で瑞々しい野菜と美味しそうなハムが、こんがりと焼けたパンに挟まれていた。また全体的な量も思っていたよりも多そうである。

「冷めないうちに、食べなさいよ。洋さんのサンドイッチ、すごく美味しいんだから」

見とれている光二に対して、水菜は早くと促す。確かに出来立てに優る食べ物はない。

「そうだね、いただきます」

手を合わせて挨拶をしてから、早速食べ始める。

口の中に入れると、野菜とハムがパンに上手く合っており、素直に美味しいと言うことができる。洋の優しさも全て詰め込まれたであろう、サンドイッチ。それがひしひしと伝わってきた。

そんな風に幸せそうに食べている光二を見ながら、水菜は微笑んでいた。

第3話 挟まれる想い (2)

やがて食べる速度を少し落として、光二は水菜と向かい合いながら話をし始める。家族や学校のことなど、他にも色々雑談をしつつ、穏やかな時間を過ごす。

時間が経つにつれて、人々の装いも変わってきた。家族連れがいたかと思えば、親しい男女、友達同士など、様々な種類の関係がいる。

また、幅広い年代があり、光二たちのような学生から、子育てにひと段落した年代までいた。このような状況は、他で経営している喫茶店ではそうはいかないものである。立地条件や喫茶の内容などで、どこか客層に傾きが生じてしまうものだ。

しかし、洋の人望や、巧みなメニュー、そしてこの喫茶店の素敵な雰囲気によつて、どの人でも来やすい空間を作り出しているのかもしれない。

光二はそんなことを考えつつも、サンドイッチをあつという間に食べ終え、水を飲みながら、水菜と何気ない会話を続ける。

少して二人の会話が途切れた時、水菜が塾で使っている理科のテキストを取り出し、今度はそれを元に二人で勉強し始めた。光二が使っているものより難しくはないが、それでも学校では教え切れていない問題ばかりである。

問題を読んで答えを出し、その過程を簡単ではあるが、自分が考えた解き方を通じて、水菜に説明した。それに対して、相槌を打ちながら彼女は聞いている。

「へえ、こういう意味だったんだ。授業で聞いても、すぐに次の問題に行くから、理解しきれないのよね」

「そうそう。とにかく塾は問題数をこなすことに一生懸命だから、その場で理解しないと難しい。それか家に帰って復習するのもありけど、全部の教科をじっくりやっていたら時間が無いな」

「そういうあなたは、その場で理解しているんでしょ。すごいな。どうしてそんなに勉強ができるの？」

「勉強ができるっていうか、そうでもないけど……」

羨ましそうに見てくる水菜だが、光二は複雑な気持ちであった。勉強はする方ではあるが、ただ単に言われたことをこなしているだけである。こなすことで成績もそれなりに上がり、塾のコースも上に入れてもらえた。

しかし、さらに勉強する人はもつという。成績が伸び悩み始めた光二にとって、その人たちの存在は恨めしくもあった。そして勉強をすることに対して迷い始めるきっかけとなっているのだ。

「どうしたの？ 表情が暗くなっているよ」

水菜が心配そうに顔を覗きこんでくる。その視線に気づき、光二は軽く首を横に振った。

「いや、何でもない」

「何でもない？ そんな顔していなかった。私でよければ話を聞くよ」

真摯な目を向けてくる。彼女なりの気の使い方なのかもしれない。同じ塾に通い、選抜コースである水菜ももしかしたら同じ悩みを持っているかもしれない――。だが、そうだとしても、これを直接話すのは気が引けた。もう一つ別に考えていることを尋ねてみる。

「……鈴原は、どこの高校に進学希望なんだ？」

「私？ 私は塾のコースの通り、隣の市にある県立高校。弟がいるから、なるべく学費は安くって言われているの」

「あの県でもトップに入る県立高校か。都内には近くても、県立思考は変わらない人が多いのか」

「県立だからっていうわけでもないわよ。パンフレット見たり、話し聞いていたりすると、楽しそうだからね。今度文化祭に行つて、最終的に決めるつもり。学力とかは二の次よ」

そうは言っても、成績や偏差値は気にしているだろう。光二に理科を教えると言ってきたことからわかることだ。

「ねえ、そういう君は？ やっぱり難関国立か私立を狙っているのよね」

「まあ、そうなるかな……」

少し曖昧に返事をした。その様子に水菜は首を傾げる。

「違うの？」

「どうなんだろう。正直言つてよくわからない」

「え？」

視線を下げ、コップを横に振って中に入った氷をからからと鳴らす。氷同士がぶつかることで、少しずつ碎けていく。本当に些細な出来事なのに、最終的には氷が溶けてしまふ一つの要因となるのだ。光二は溶けてできた水を少しだけ喉に通す。そして目を丸くしている水菜とその下にある空のコップを見た。

「水、お代わりしようか」

「そ、そうね。すみません、洋さん！」

お皿を片づけている洋を呼び止めると、さっと近寄ってきた。

「何かな？」

「お水のお代わり、もらえますか？」

「はい、ちよつと待っていてね。——ああ、そうだ。このお皿を洗い終わったら手が空くから、少しだけけど勉強見るよ」

いつの間にか店内にいる人々は読書をしながらコーヒーを飲んでいる、女性だけとなっていた。午後二時過ぎ、昼のピークは過ぎたが、それにしても早い減りようである。

「少しだけって、まだ二時じゃないですか」

「あれ、光二君、表の看板見なかったの？ 君らしくないね」

「看板？」

「今日は事情があつて三時で閉めるんだ。その様子だと、先週も言つていなかったね。ごめん」

気づかなかつた事実を聞かされ呆けている光二を見て、洋は両手を合わせて申し訳なさそうな顔をした。彼の仕草を見て、慌てて両手を振って否定する。

「洋さん、別に大丈夫ですから！ まあ義樹はこの事実を知らずにこのこ来そうだが……。まあ、池中もないし、たいしたシヨックは受けないだ——」

「ちよつと待て！ 何だ、その話は！」

光二の表情が瞬間的に引きつった。馬鹿みたいに大きく、他人の迷惑など考えたことがないであろう声が耳に飛び込んでくる。そういえば、光二が口を開いている途中で入り口のベルが鳴った気が……しなくもない。

意を決して振り返ると、予想通り口を大きく開けている義樹がいたのだ。

「よ、洋さん、今日はもう終わりってことか？ それに恵美香ちゃんがない？ そんな……、俺の日頃の行いがそんなに悪いのか！」

「いや、関係ないって。ていうか、悪いから」

「そのくせ、光二は勝手に鈴原といちゃいちゃと仲良くやっているし。何たる不公平さ！」

「ただ席が埋まっていたから、相席しただけだから。誰がいちゃいちゃだ、勘違いするな。いい加減に黙っている！」

光二は立ち上がり、義樹のみぞおちに拳を入れ込んだ。うめき声を出しながら、腹を抑えて座り込む。何か言いたそうだったが、声を出すのも躊躇うほど、痛いらしい。

そんな義樹の姿を見もせずに、光二は苦笑いをしている洋の方に向いた。

「すみません、馬鹿が声を荒げてしまい」

「いや、別に僕は構わないけど。いいのかい？」

「いつものことなので、放っておいてください」

「そう、わかったよ」

洋は大人しく光二に従うことにしたらしい。

水菜はいつも邪険に扱っていた突然の乱入者に対して、珍しく気の毒そうな顔をしていた。

「……君も大変そうね、きつい突っ込みが相方だと」

目を白黒させている義樹に同情の言葉を送った。

やがて洋は水が入ったポットとコップを一個持つてくる。そして光二と水菜のコップに水を注ぎ、隣の机に水が入ったコップを置いた。

「義樹君、色々悪いことしちゃったね。あと一時間だけだけど、ゆっくりしていつて」

「ど、どうも……」

少しずつ回復はしているようだが、まだ本調子ではない。義樹は這いずりながらも、やっと椅子に腰を下ろした。そして水をゆっくりと飲み干す。

それを一切無視する形で、光二は英語のテキストを開いた。洋に教えてもらう問題のページをめくったところで、義樹がふと素朴な疑問を口にする。

「なあ、洋さん、どうして早く閉めるんだ？ 何か特別な日でもあるのか？」

何気なく聞いたことだが、洋の笑顔が消えた。

だがそれも一瞬で、すぐに表情を戻す。

「ちよつと知り合いに会う用があつて。今日しか都合が合わなくてね。まあその分、お盆休みは短めだから」

「そんなに会いたい人って、もしかして彼女？」

また軽いので彼は人の感情の内部まで入っていく。適当に流しているですよ、そう言う前に洋の声によって遮られた。

「——違うよ。ただの——旧友に会うだけ。それ以上でも、それ以下でも——ない」

一音一音間違いないように言葉を紡ぐ。その言い方がいつもと違っており、思わず洋の表情を見ようとちらつと見上げる。その目はいつになく真剣で、拳を握りしめ、心なしか震えているように見えた。

そんな洋を見るのは初めてであった。いつも笑顔で人と接する彼が、どこか思い詰めたような表情をするなんて。

質問をした義樹も少し困惑しているようだ。目の焦点が合わず、どこにやればいいか迷っている。

だが少しして、洋は顔を和らげた。

「それよりも、あまり時間もないから、何か質問があるのなら、早めに言って欲しい」

「あ、はい、洋さん。……この和訳、上手く英訳できないんですけど」

「どれどれ……」

穏やかな表情のまま、光二に示された問題文を読む。だが、その姿にどこか違和感を覚える。

その考えを胸に秘めながら、光二や水菜は洋に気になっていた問題の解答への過程を聞いていた。その間、義樹を脇に置いておくのはもちろんである。

これで洋に教えてもらうのは三回目だが、本当に分かりやすいと思う。だからこういう疑問が出るのも必然であった。

「洋さんはどうして喫茶店を経営しているんですか？ その様子だと、勉強は好きだったんでしょ？」

「そうだね、好きだったけど、事情が重なったんだ。将来へ続く様々な出来事が」

その言葉から洋のほろ苦い気持ちが垣間見えた。

「光二君は、将来どうなりたいの？」

「俺、ですか？」

「そうだよ。君だって、頑張って勉強しているよね」

「いや、俺は頑張っているほどではないですよ。……将来なんて、考えられないです。半年後、もっと言ってしまうば明日でさえ考えきれないのに」

日々、迷いの連続だ。

今、何をすればいいかなんて、わからない。どうして勉強をするのかと疑問に思ってしまう。それがとても悩ましい。理由が見つからない。

ただ無我夢中にボールを追っかけていた日々とは違うのが、どことなく切なかった。

「今が楽しければいいじゃないか」

光二の思考を遮るように、義樹が腕を伸ばしながら、一言投げる。
「今が？」

「そうだ。そんな色々考えても、もったいないだろう。楽しく生きる方向を見た方がいいって」

人生そう単純じゃないって言いかけたが、正直言って義樹の言葉に惹かれたのも事実であった。

この少年はいつも光二に対して、変わった風を吹き込ませる。それは大半が迷惑だが、時としてありがたいときもあった。

「今が楽しい——それも悪くないね、義樹君」

ぼつりと呟く洋は薄らと笑っていた。

「今日の洋さん、変だったよな」

午後三時過ぎ、太陽が照りつけるアスファルトの上を自転車で走らせる二人の少年が疑問を口にする。

「お前も気づいていたのか」

光二はさも意外そうに相槌を打った。

「わかるさ。俺を馬鹿にしているのか？」

「いや、別に」

思っていたことを軽く受け流した。

自転車を走らせている途中で信号が赤になり、ブレーキをかけた。そして自動車が目の前を通り過ぎるのをぼんやりと眺める。

「何か特別な日なんだろう、今日は。それでいつもより気持ちが浮ついていたとか」

「そういうものなのかな……。まあいいや。とりあえず、明日は塾ないんだろう。喫茶店に行こうぜ、抜け駆けなしに」

「ああ、鈴原とも約束したからな」

喫茶店を出た直後、躊躇いがちではあったが、水菜から誘つてきたのだ。その様子はどこか洋のことを心配しているようにも見える。光二は義樹に対して返事をする、がらりと顔つきを変えた。

「そうと決まれば、今日は早く帰ってゲームでもするか！」

信号が変わると、義樹は勢いよくペダルを漕ぎ始める。気が付くとすでに置いて行かれてしまった。

周りを見ない義樹にはあつと深く息を吐く。

義樹や水菜に言われなくても、明日は行くつもりであった。

漠然とした予感というものが、脳裏をよぎっていたから――。

第3話 挟まれる想い (3)

* * *

洋が喫茶店を早く閉店させた翌日、いつになく天気はどんよりしていた。空は灰色の雲に覆われ、朝から生ぬるい風が肌にべとつく。気温は高いが、乾いた風が吹いていた暑い天気よりも、こういう天気の方が光二にとっては嫌であった。

なぜなら、その天気と共に、何となくもやもやした感情も浮かび上がってしまうからだ。

手早く昼食を済ませると、塾のテキストを数冊と折りたたみ傘も鞆に詰め込んで、光二は外に出た。雨が降りそうな気配ではあるが、まだ降った形跡はない。

鬱々とした気分になるのを振り払うかのように、光二は自転車に跨ぎ、一生懸命ペダルを漕ぎ始めた。

ランチの時間帯が過ぎた頃に、光二は喫茶店に辿り着いた。自転車を停めている間に、髪を揺らしている水菜が自転車のベルを軽く鳴らしながら、光二に近づいてくる。それを軽く手を振って受け返す。

「偶然ね、特にはつきりと時間は決めていなかったのに」

「だいたいは検討が付くだろう。ちょうど空きそうな時間を考えれば」

「さすがよくわかってるね。今日は洋さん、通常営業だから、ゆっくりと夕方までいられるよ。まあまた明日から休みだけだね」

店の前にある看板を見ると、営業時間と共に、お盆週間の休日案内のちらしが貼られていた。その始めの方には、昨日のことも書かれている。それを横目で見ながら、店内へと入っていった。

予想通りそこまで混んではいなく、すぐに席に案内された。月曜

に来たことに多少驚いていたが、すぐにお盆だとわかり、納得したようだ。

席は日がよく当たる場所ではあったが、今の曇り加減からはその面影はない。

いつも通り、まず飲み物を注文し、出てくるまで待っていた。その間、水菜と話をしていたが、意識はどこか洋の方へと向けられている。手際よく準備をしているのが見えるが、どこか表情に元気がない気がした。

「ねえ、ちよつと、ちよつと」

「あ、何？」

慌てて意識を水菜の方に戻す。少し頬を膨らませている少女がいた。

「洋さんのことが気になるのはいいけど、私のことも忘れないでよ」

「ごめん、つい……」

「……まったく変わらないのね、誰にでも心配するのは」

「何だつて？」

ぼそりと言った内容がよく聞こえず、聞き返してしまう。だが水菜は何でもないかのように、すぐに小さく首を振った。

「何でもない。さて、昨日の分を取り返すべく、たくさん質問しようか」

「そうだな」

水菜は鞆からテキストを取り出した。そして雑談を交えながら、勉強をし始める。

比較的店内は空いていたため、すぐに洋の手も空き、勉強に付き合ってくれた。教え方の巧さは健在である。一字一句聞き逃さないと必死にメモをした。

一時間ほどして、義樹もやってきた。すでに二人が親しく勉強しているのを見て、口を尖らせていたが、洋のいつもと変わらない様子にはつと胸を撫で下ろしているようだ。

外では徐々に分厚い雲が覆われ始め、いよいよ雨が降りそうな気

配を漂わせている。

店内もそれを危惧して、客のほとんどが店を後にした。まだ閉店一時間前であるが、もう光二たちしか残っていない。

「雨、降りそうね」

ペンを持ち、窓の先の景色を見ながら、水菜は呟く。義樹はそれを聞いて口をあんぐりと開け、一人だけ衝撃を受けていた。

「雨だと？ そんな話、聞いてねえ。傘なんて持ってきてないぞ！」

「一週間前から、予報では雨が降るって言っていたじゃないか。そのくらい、テレビを見ていればわかるだろ」

「見てねえって。昨日言ってくればよかったのに……」

「知るか、そんなこと」

「本当に光二って、冷たいよな」

「今頃気づいたか。馬鹿だな」

「な……！」

義樹がわなわなと口を震わせていたが、それを素知らぬふりをして、テキストに目を向ける。

そんな中で、ドアベルが店内に響きわたった。こんな時間に誰だろうと思ひ、顔を上げると、バレッタで髪を一つにまとめ上げた綺麗な女性が立っている。

柔らかな素材でできている半袖、七分のズボンを着こなし、颯爽と中に踏み入れた。

「いらっしやいませ、お一人ですか」

「ええ」

「わかりました。では席にご案内いたします」

女性はどこか探るような目で案内をする洋の背中を見ている。その様子は今まで喫茶店に訪れた人々とは、まったく別な気がした。

この前青年が案内された席へと促され、洋が水を持ってくる間に、軽くメニューを眺める。そして持ってきた洋に対して注文を言った。

「紅茶と季節のタルトを一つ」

「かしこまりました。少々お待ちください」

タルトまで注文するとは、少し驚いた。時間や雰囲気からして、紅茶だけで済ましそうな気がしたのだ。

両腕を机の上に付きながら、女性は店内を見渡しつつ、洋を視線で追っていた。

「洋さんの噂を聞きつけて来た人かな」

「噂って？」

水菜がぼつりと漏らしたのをしっかり聞き取り、質問し返す。

「街角の一角に素敵な青年が喫茶店を経営している噂よ。洋さん、格好いいだけでなく、すごく優しくて素敵でしょ。女性としては憧れの男性よ」

「確かに、男の俺でもいい人だと思う」

素直な感想だ。だが、そうだとしても、少し普通とは違っている気がした。

洋が紅茶とタルトを持ってくると、彼女の視線はタルトへと真っ直ぐ向けられる。ホールを切り分けられて出している季節のタルトはケーキの中でも人気が高く、売り切れてしまうことも多々ある。それをフォークで刺して食べ始めた。女性は一口一口味わいながら食べている。タルトの上に乗っているフルーツも丁寧に口に運んだ。だがあるフルーツを前にして、フォークが止まる。

それは夏みかんだった。

よく熟した夏みかんで酸味もある。ほんの少し止めていたが、すぐに夏みかんとタルトを共に口の中に放り込んだ。味わいながら食べ、紅茶を一口含ませる。

やがて女性はタルトを平らげたところで、フォークを置いた。

「……上原陽さん」

水が入ったポットを持って近づいていた洋はその言葉を聞いて、一瞬身を堅くした。この喫茶店では本名で呼ばれることはほとんどないことだ。

女性はゆっくり顔を上げると、洋を正面から見る。彼女の瞳は揺れており、どこか困惑した様子が感じ取られた。

「上原陽洋さんですよ」

「そうです。失礼ですが、あなたは――」

「忘れてしまいましたか。もう三年の月日が経ちましたものね」

「三年――！」

洋の表情が一転する。机にポットを置くと、丸くした目を女性に向けた。

「君はもしかして晴美ちゃん？」

「思い出しましたか。そうです、小川晴美です。小川夏美の妹の」

晴美は淡々と声を発した。それを聞いた洋は驚愕の表情をしている一方で、拳が微かに震えているようだ。

「晴美ちゃん――、どうしてここに？」

「偶然、友人から爽やかな青年が経営している喫茶店の存在を聞いたんですよ。いい茶葉を使っているため飲み物はどれも美味しい。

独特の癒しの空間。何よりケーキがとても美味しいと。雑誌に掲載されていないのが不思議なくらいだって」

確かに、この店内には雑誌で紹介されたページの紹介などはない。客のほとんどが口コミだと聞いている。口コミだけではもったいないレベルなはずなのに。

「私もその言葉に惹かれて、一度入ってみようと思いました。ですが、入り口であなたの顔を見て、驚きすぎて中に入れませんでした。ここにいるはずのないあなたが、いるということに」

グラスに入った氷が少しずつ溶けていく。洋は歯噛みをしながら、視線を横にずらした。

「……どうして、こんなところにいるんですか。あなた、最後に会ったときは、行くとって言ったじゃないですか！」

晴美は机を両手で叩きながら、立ち上がった。彼女の目には薄ら涙が溜まっている。

「嘘だったのですか、あの言葉は！ 姉への想いを踏みにじったのですか！」

「違う！」

ぴしゃりと晴美の声を遮った。だが依然、洋の表情は揺れている。「違う。――夏美の想いは踏みじつていない。これは確かだ」

悲痛そうな顔で言う洋に、晴美はすっかり勢いを削がれてしまい、再び椅子に座った。

「昨日の花を見て、あなたがまだ姉のことを想っていることはわかります。そしてこの喫茶店の名前からも伝わってきます。……けど、それなら何故まだ日本に居るのが疑問に思います。どうしてですか？」

洋は質問にも答えずに、黙り込んでいた。それが正しい行為ではないのはわかつているのに、敢えてそうしているようだ。出す言葉が見当たらないのか、本当に言えないのか。

何も反応のない洋を見て、晴美は財布を取りだし、机に代金を置いた。

荷物をまとめて立ち上がり、俯いている洋の横から囁く。

「ごちそうさまでした。ケーキ、美味しかったです、まだ躊躇いがあるように感じます。――また来ます」

そう簡潔に言うと、哀愁の顔をしながら、洋に背を向けて出ていった。それを振り向きも、追いかけてもせず、彼は立ちすくんでいた。

重い空気が流れる中、唐突に氷が動いて、グラスに当たる音が響く。そしてそれを皮切りに、突然雨が外の地面や喫茶店の屋根を叩き突きつけ始める。

夕立だ。

一瞬で外は雨の世界へと変わる。どんよりとした雲は、さらに人々の心に憂鬱をもたらす雨へと変わった。

その音によつて、止まっていた洋の体は動き始め、代金をポケットに入れて、皿を片づけ始める。

ずっと二人の会話を聞いていた、少年少女たちはお互いに見合う。その中で義樹は残っていたジュースをストローの音を立てて吸い始

める。

それを聞いた洋はやつと三人の存在を思いだし、若干気まずい表情をした。

「あ……ごめん。今の話、全部聞いていたよね」

「そりゃ、隠れる場所もないからな、聞いちゃったよ。なあ、光二に鈴原」

躊躇いもなく言い返す義樹に顔が引きつりそうだった。

「あ、ああ……。すみません、洋さん。聞くつもりはなかったのですが……」

「——いいんだよ、別に。気にしないで」

だが返す表情はまったく笑っていない。おそらく洋にとって、隠したい過去の一角なのかもしれない。光二たちより付き合いが長い水菜でさえも知らない過去。軽く踏み込んだだけでも、こちらの心も痛い。

「そういえば、洋さんって、ケーキの方が専門なのか？ ほら、ケーキを専門で作る……、何だっけ」

「洋菓子とかを専門に作るパティシエ」

「そうそうパティシエ。それ目指しているの？」

こつも空気も読まずに、遠慮なく自分の聞きたいことを質問する、義樹がある意味羨ましかった。

洋は直球で質問してくる、義樹に対してきょとんとしている。そして数瞬の間を置くと、皿を洗う手を休めて、三人に近寄ってきた。「そうだよ、僕はパティシエを目指していた。あるパティシエを目指していた人が作ったケーキに見惚れて、その道を考えていた」

「考えていたってことは、今は考えていないんですか？ けどこの前、私たちにとても美味しくて、見た目も綺麗なケーキを出してくれたじゃないですか」

疑問を口にする水菜。それを聞いた洋は微笑んだ。

「よく覚えているね、そのこと」

「覚えていますよ。今まであんなケーキ食べたことがなかったから。」

何があつたか知りませんが、まだ諦めたように見えません」

はつきりと言い切る水菜の声はとても力強く、人の心を動かす一
声になる。

「諦めていない——か。逆に諦めたらどんなに楽だったのか」

呟く声はどこか自嘲気味。何かを悔いているのが聞いている方でも感じ取れる。光二は意を決してこの店の根本的なことを尋ねた。

「洋さん、どうしてこの喫茶店を始めたのですか？」

時計の秒針が一定の周期で動く音が聞こえる。

だが外の雨によって、一瞬で消されてしまう。

どこか不可思議な状況の中、洋は重い口を開いた。

「始まりは——君たちと同じ歳に出会った少女とだった」

やがて止まっていた過去が少しずつ動き始める——。

第4話 角砂糖が溶けるまで (1)

——ねえ、その夢、どうして追いかけないの？

笑顔でそう言ってくれた女性は、名前から想像できるようにとても明るい人だった。

夏のように温かく、眩しい存在。

その名は——夏美。小川夏美だった。

* * *

出合いは上原陽洋が中学三年生の時、数日後に行われる文化祭の準備をしている最中だった。

文化祭実行委員であった陽洋は放課後、教室でくす玉の垂れ幕を他の実行委員と一緒に作っていた。しかし、塾がある、部活があるなどと言われて、最後までいたのは陽洋だけ。

文化祭のすぐ後には、三年生は実力テストがあるため、早く帰って勉強をしたい気持ちもあったが、断るに断れずに、結局最後までいたのだ。やがて、区切りのいいところまできたので、片づけを始めていた。

窓の外を見れば、綺麗な夕陽が見えた。眼鏡の上から手をかざし、それをもう少しじっくり見ようとする。

だがその途中で教室のドアを引く音がした。ドアの外には、勝ち気であるが、とても明るく、クラスの中でも目立った少女が腰に手を当てて立っている。

「あら、他の人は？」

「用事があるから、帰った」

「帰った？　それで上原君だけ残っているの？　何だか不公平な話ね」

短髪の少女は教室の中へと踏み入れ、片づけ途中の床を見ると、しゃがみこんでそれらをかき集め始めた。

その様子を見た陽洋は慌てて近づいて、止めようとした。

「いいって、これは僕の仕事だから」

「押しつけられた仕事でしょう。上原君が自分だけ無理してやることない。これは私が進んでやっていることだから気にしないで」

「でも——」

「ああ、もう、優しすぎるのよ！　人に頼るってことも考えなさい、上原陽洋！」

少女は一気に言葉を吐き出すと、きつと鋭い視線を送る。だがその視線は突き離す視線ではなく、陽洋を思つての行為に感じられた。それを感じ取った陽洋は表情を緩ませて、静かに微笑んだ。

「ありがとう、小川さん」

小川夏美は、それを聞くと満面の笑みを浮かべた。

* * *

同じクラスであつた陽洋と夏美は、文化祭の出来事の後から、少しずつ関わりながら、会えば話をする仲にまではなっていた。

だがお互いの高校受験までは干渉しなかつたので、二人がどこを受けるかは知らなかつた。だから、偶然にもある県立高校での合格発表で出会つたときは、二人とも驚いたものだ。

「私さ、上原君はもつと上の高校を目指しているかと思つた」

桜に蕾が付け始める季節に、偶然帰り道を共にしているときの言葉だつた。

「あの高校より上だともう私立しかないから。僕、三人兄弟の末っ

子だから、極力なら県立に通ってくれって、口を酸っぱくして言われていたんだ。それにあの高校が何となく好きなんだ。だから、そんな風に言われると……、少し残念だな」

「そ、そういうつもりで言っただけじゃないよ！ ただ、もったいないな……なんて。上に行けば、もっと道が開けるんじゃないかなって思っただけ」

夏美がそっぽを向いて言う姿に、若干可愛さがにじみ出ている。だが彼女の言葉を聞いて、どこか哀愁が陽洋の中に漂っていた。

「……道なんて、まだないよ。わからないことだらけさ。だからどの道を進んでも、どうなるかなんて予想できない」

思いついた言葉でさらっと流した。笑い事に近い内容かもしれない。

だが、夏美は軽く頷いて、むしろ同意の意を示した。

「そうそう。けどわからないからこそ、楽しんじやないの？ わくわく、そしてドキドキする毎日。先がわかっていたらそうはいかないよ」

そういう風に優しく語り返してくれる姿に、陽洋は少しずつ夏美に惹かれていった。ただ明るいただけでなく、包容力のある言葉にも惹かれて――。

* * *

やがて二人は高校に入学し、クラスも一緒であったため、必然的によく会い、話すようになっていた。だがお互いの距離はそこまで急激に近くなっただけとは言い難い。

夏美はその明るさと行動力から、学級委員をてきぱきとこなす少女であり、女子からも男子からも人気があった。一方、陽洋も、地味な存在ではあったが、仕事はしっかりとやりこなすことから多く

の人に頼られ、またその優しさから密かに女子から好意を寄せられていたのだ。

そんな中、ふとした機会に陽洋の呼び方について、話題に出されることがあった。同じクラスにも明裕あきひろと呼ばれている少年がおり、彼の方が定着率が高い。さらに女子には、上原という少女もいたため、その二人に対して被ってしまうことがあったのだ。

「その漢字で？あきひろ？って呼ぶのもあまりないわよね」

夏美が放課後の庭掃除中に何気なく漏らした言葉だ。それに対して、髪をかきながら、困ったような顔で受け返す。

「そう言われても、両親が付けた名前だから、何て言ったらいいか……」

「悪いって言っているわけじゃない。むしろどうしてそんなに素敵な名前を付けたのか疑問に思っただけ。どんな由来か知っているの？」

「ま、まあ。昔、授業で由来について聞いて来いっていう宿題が出されたから」

呟いた言葉を敏感に察知した夏美は、目を輝かせて見つめてくる。その行動を予想していた陽洋は話を続けた。

「……太陽のように明るく、太平洋のようにとても広い心を持った人物になることを願って付けたい。無理矢理付けた気がしなくもないが」

それを聞いた夏美は相槌を打ちながら頷く。そして名案を閃いたような顔をした。

「太陽と太平洋……奥深い意味合いね。……そうだ、上原君、これから？よう？って呼ぶのはどう？」

「？よう？？」

「太陽の陽でも、太平洋の洋でも同じ読み方じゃない。それなら、二つの漢字の意味も損なわないでしょ」

どうだと言わんばかりに笑みを浮かべる。

そんな風に、陽洋は自身の名前の意味について深く考えたことが

なかったため、その考えは新鮮であった。何より、この少女が付けたことが非常に嬉しかったのだ。

「……？　よう？　か。いいね。人に教えるときは太平洋の洋で伝えようかな。そっちの方が、呼びやすいだろうし」

「そうね、じゃあこれから洋って呼ぶね。よろしく、洋」

嬉しさをはにかみながらも精一杯表す。その時の笑顔は今まで出会った誰よりも魅力的であった。

その後、二人の距離は少しずつだが確実に縮まっていき、学年が変わり、クラスが分かれても、付き合いは続いていた。

やがて夏美がある少年から告白されたという噂を耳にした洋が、意を決して告白したことにより、正式に付き合いは始まったのだ。

不器用だが、温かみのある絆を元にして。

* * *

やがて、大学進学を見据えた選択によって、二人の歩む道に違いが生じることになる。

洋は語学に、夏美は理工学系統に興味があったため、高校二年に進んだ時点で文理に分けられる都合上から、クラスが離れるのは当然。意図的に接しななければ会にくい状態になっていた。始めは会うように努力していたが、次第に受験という文字がちらつき始めると、会う機会も減ってくるものだ。

そんな中、勉強に煮詰まり始めていた三年の夏休み、洋と夏美が補習の後に久々に再会し、遠回りをしながら帰宅途中のことであった。

比較的爽やかな夏の夕暮れで、散歩するにはいい具合の天気であ

る。夏美が補習の講師のダメ出しを口々に言っているのを、洋が苦笑いをして聞いていた。

「まったく、みんなが全然理解していないとわかっていながら、どうして先に進もうとするのかしら。今日であの先生の補習が終わるし、期間が短かったからいいものの……」

「夏美はそういう所には厳しいよな。どんな先生でも積極的に質問をしに行くし」

「わからないところを、わからないって言うだけ。はあ、世の中自己中心的な大人ばかりだと思うとうんざりしてくる」

そんなことを膨れながらしゃべる姿が洋はどこか微笑ましく感じてしまう。その視線に気づいた夏美が不審そうな目を向けてきた。

「何か？」

「いや、何でもない」

「……そういう風にいつもはぐらかすよね。嫌な感じ」

乾いた笑いをしながら適当に返そうとする。だが、急に視線を他の方向に向けたまま夏美が立ち止まった。洋もつられて足を止める。その視線の先には一件の店があった。目を凝らして看板を見れば、喫茶店だとわかる。街角の一角にある喫茶店。夏美でさえも知らなかったという顔をしている。

「——洋、今日は時間ある？」

「まあ、少しは」

「じゃあさ、少し寄っていかない？ 気分転換にのんびりお茶でもしよう」

にこりと笑いながら洋に向く。断る理由などどこにもなかった。すぐに頭を縦に振り、肯定の意を示すと、夏美は鼻歌を歌いだしそんな勢いで、入り口へと近づいた。

そしてゆっくりとドアを押すと、カランと小気味のいい音が耳に入ってきたのだ。

中に入ると、何となくだが心休まる音楽が流れている。ラジオの有線などではなく、どこからか持ってきたCDなどの音。喫茶店の

中は空いており、一組の男女がいるだけであった。

「いらつしゃい。おや、見かけない顔だね」

入り口で立ち止まっていると、店員なのかエプロンを着た優しそうな顔をしたおじさんがカウンターから出てきた。

「はい、初めてですね、ここは」

「そうかい。こんなところによったのは偶然かな？」

「そうです。たまたまいつもととは違う道を通ってみたら、素敵な喫茶店が目に入っただので」

「それは嬉しい言葉を。ここまで君たちを導いてくれた何かに感謝をしなくてはね。たいしたところではないが、ゆっくりしてゆっくり。席は好きに座ってどうぞ」

「ありがとうございます」

夏美が微笑みながら返すと、洋を促して席を選び始めた。席数はそんなになく、ごんまりしている印象を受ける店内。そんな中で洋と夏美は奥の四人席に腰を下す。

そしておじさんが持ってきたメニューと水を受け取った。少し古びているメニューだが、それがむしろ喫茶店の雰囲気と合っていてとてもいい感じだ。軽食と飲み物、そしてデザートといった内容である。

喉も渴いていたため、なるべくすっきりとしたものが飲みたかった洋は、すぐに選び終わった。だが、夏美は飲み物とデザートのページを行ったり来たりしている。

「どうした？」

「いやあ、どっちも捨て難いなって」

「じゃあ、両方頼めば？」

「今はお財布の中身が恋しい時期なのよ」

夏美は溜息を吐きながら、しょんぼりとする。洋は財布の中身をこっそりと確認した。たまたま臨時収入があったため、いつもより潤っている。

「夏美、お疲れみたいだから、今日は特別におごってもいいよ？」

「え、本当？」

目を輝かせて見てくる。それに洋はしっかりと頷いた。

「嬉しい、ありがとう！　じゃあ、洋にもデザート少しあげるね。

……おじさん、注文お願いします！」

元気で明るい声で呼ぶと、おじさんはにこにこしながら、近づいてきた。

「はい、ご注文はなんでしょうか」

「アイステイーを一つ」

「私は紅茶とフルーツタルトを一つずつ」

「わかりました。少々お待ちください」

そう言つとすつとおじさんはカウンターの中へと戻った。

どこか気分も明るくなりそうな音楽を聞きながら、注文したものが出てくるのを、洋と夏美は待っていた。その間、久々の話に華を咲かせている。授業やクラスのこと、特に夏休み明けにある文化祭の話題には二人とも底が付かなかった。

程なくして、おじさんはお盆にのせて注文した品を持ってきた。

第4話 角砂糖が溶けるまで (2)

アイスティーとガムシロップは洋の前に、紅茶とフルーツタルト、そして四角い角砂糖がぎっしり詰まった瓶を夏美の前に置く。「ごゆっくり」と、一言伝えて、おじさんはのんびりとさっきいたカウスターへ歩いていった。

洋は夏美の前に置かれた角砂糖に目をやる。

「角砂糖なんて、珍しいね」

「そうね、今は個装が主流だから。特にチェーン店は持ち運びもできるスティック状のものが多くから、あまり見ないでしょ。でも私はこっちの方も結構好きよ」

蓋を開けて、角砂糖を一つつまみ出す。そして静かに音をたてながら、紅茶の中へと入れた。

砂糖は徐々に分解され、固まりから個々の粒へと変わっていく。それをスプーンでかき混ぜることによって、さらに速度を増す。やがて、あっという間に砂糖は見えなくなってしまった。

「——ねえ、砂糖って完全には溶けきらないものなのよ」

夏美は紅茶を一口含ませてから言葉を紡ぐ。

「溶けたように見えても、底の方に溜まっている。まるで完全には周りと協調なんてしないと行動しているようなものよね」

「けど、砂糖の性質的にそれは仕方ないこと。それに他のものだって、混ざらないものはたくさんあるだろう」

「その通り。そう、人と人との関係も、そして自分の中での考えた方も完全には混ざらないのよね」

夏美はゆっくり味わうように紅茶を飲む。その優雅な描写は絵になるものがあつた。それを見つつ、洋はストローでアイスティーを飲み始める。

「——私さ、自分の行動に自信が持てないときがあるんだ」

「夏美が……？」

意外な言葉に、洋は目を丸くする。

「人にどう見られているか知らないけど、たぶん私、真っ直ぐに何かを追い求めているように見えるでしょ」

洋は少し考えつつも、軽く首を縦に振った。それを見つつも、夏美は続ける。

「だけどいつもどこかで迷いが生じている。果たしてこれでいいのかって。確かにずっと橋造りや設計に憧れがあつて、今の大学を目指そうと思っていた。でも、本当は違うんじゃないか。ただ昔の自分の想いを裏切らないために、時の流れに沿っているだけで、本心は別の所にあるんじゃないかって。——まるで意固地になつて、最後まで溶けない砂糖の粒と同じみたい」

苦笑をしつつも、夏美は胸の内を明かしてくれた。その何とも言えない複雑な表情が、洋の心の中に埋め込まれた。

人は分岐に立たされ進んだ後は、何らかの後悔やどうしようともいえない迷いの道にさまようかもしれない。果たしてそれが正しい選択だったのか、本当の気持ちはどこか別の所にあるのではないかなど。

普段は多少悩んだりするが、とりあえず進んでみようという考えに達するだろう。しかし、大学受験の勉強も徐々に追い打ちをかける精神的に不安定な頃は、ついその悩みによって立ち止ってしまうのかもしれない。

「——今は、必死にそれが正しいことだと思おうとしている。だって、私がずっと興味があつたこと、それ以上のことはないと思つたから。——駄目だね、こんな固い考えた方は。一度走らせたトロッコを止めることができないなんて」

彼女の奥底の気持ちは洋も感じ取ることができた。意味合いは少し違うが、そのような悩みは体験したことはある。一心不乱に取り組んだ部活動や文化祭準備。やっている時は何も感じないが、ふとした空白の時間にはつい一呼吸吐いてしまう。

おそらくどれがいいという、答えなんてあるわけない。それでも

何らかの言葉が欲しいのも事実であった。

「何やら青春の悩みでもしているのかい？」

店員のおじさんが、コーヒーを片手に近づいてきた。気がつけば残っていた客は店から出ており、店内は洋たちとおじさんだけになっている。

「青春の悩みって、どういうのをそういう風に言うのでしょうか」

「恋愛のこととか。だが、君たちにはそういう心配はなさそうだ。それじゃあ、進路のこととかかい？」

「まあ、そんな所です。よくわかりますね」

「ここで君たちと同じような悩みを持った人たちと会ったことがあるし、十代後半から二十代前半は将来について漠然と不安がある時期だから、何となくわかるさ」

おじさんは隣の椅子に腰をかけて、コーヒーを一口飲んだ。そしてどこか遠い目を向けながら、言葉を漏らす。

「何かに一生懸命になることは、とても大切なことだと思う。それがその後の人生に生きるかどうかはわからないが。——お嬢さん、よかったらそのタルトを一口食べて、感想を聞かせてくれないかい？」

突然話題に向けられたまだ手を付けていないタルトの存在を思いだす。夏美は首を傾げていたが、おじさんの瞳に促されて、慌ててフォークで一口サイズに切り、ひとかけらのフルーツと共に口の中に入れる。

少しして、夏美の顔が晴れやかな様子に変化した。

「美味しい！ タルトの程良い歯ごたえ、それにフルーツとの相性もすごく良い。ほら、洋も食べてみなよ」

はつらつとした雰囲気に戻った夏美にフォークを差し出されて、若干訝しげに思いながらも受け取った。そしてタルトを少しだけ口に運んだ。

口に含んだ瞬間、何かが弾ける想いがした。

フルーツに影響を与えない程度のクリーム、そしてフルーツをよ

り美味しくさせているタルト生地が存在。どれも無駄のないものであり、調和もしっかりしている。それらの生かし方が非常に上手く、結論を端的に言ってしまうえば美味しかった。

「よかった、少しはいい表情に戻ったね」

おじさんはそう言いながら、口元を緩ませた。夏美は洋からフォークを返してもらうと、引き続きタルトを食べ始める。

それをよそに洋は顔が綻んでいるおじさんを見た。

「これは、独学なんですか？」

「違うよ。あるケーキ屋で何年か修行して、その時に得た知識をアレンジしたものだ。昔からケーキ作りや人々の笑顔を見るのが好きだった。サラリーマンになった後でもその想いは捨てきれなくて、勇気を振り絞って脱サラしたんだ」

おじさんが話している表情はとても生き生きしていた。世間では厳しいと言われている転職。それをしたことに対して、身も心も乱れたはずだ。

「脱サラした当時は今の君たちや、若者たちと同じように不安でいっぱいだったさ。でも自分の信念だけは曲げないようにした。——自分が想ったことはきつと最後まで味方だから」

コーヒークップを机において、おじさんは洋と夏美を交互に見た。「本当にこれでよかったのか、それをしている時はわかるはずがない。だけど、きつとその真っ直ぐな想いは周りからも評価される。だから、迷ったら走り抜く、というのが、私が今まで経験をし、人々と接して出した考えの一つなのだが、どうかな？」

押しつけもせず、ただ素直に自分の考えを述べるおじさん。だからなのか、何の抵抗もせずに、彼の言葉が心の中に入ってきた。

一つの考えではあるが、それを聞くことでどこか救われたような気分になる。

夏美もすっきりした表情をしていた。紅茶は飲み干されたが、よく見れば、溶けきれずに底に溜まっていた砂糖が残っている。それはただ意地で、周りと協調せずに残っていたのではない。

静かなる想いを秘めながら、自分の意志をしつかりと持っている
ということ、主張しているのかもしれない。

* * *

それからというもの、機会があれば二人はこの喫茶店に来て、勉強や話をするようになった。平日は遅すぎてやっていないため、土日の午後に訪れるのがもっぱらだ。

やがて月日は去り、無事に大学受験が終わり、卒業式も迎えた。大学は違うが、それでもずっと交際を続けることを誓ったのだ。

その後、入学して落ち着いてきた頃、洋はあの喫茶店でバイトをする事に決めた。バイト代は他の飲食店に比べると少ない。だが、ずっと通っていた喫茶店の経営に携わること、そして雰囲気を感じることができるのが、何よりの財産だった。

サークルや勉強に時間を費やしている夏美も、時間のあるときには手伝うようにしている。小さな喫茶店に賑わいが見せ始めたときだった。

そんな夏のある日、洋と夏美はデート時に、とあるケーキ屋さんへと入ったときのことだった。そこは有名なパティシエが経営している店で、いつも人で溢れ返っているのだが、偶然通りかかったときには比較的空いていたため、入ってみたのだ。

その店に入ってまず目についたのは、色とりどりのケーキがケースの中に綺麗に入れられていること。どれも美しく、美味しそうで魅力的だった。

日の光がよく入る席に案内されて、二人は各に好みのものを注文する。少しして、その品と飲み物が出てきた。

洋には苺のロール、そして夏美にはフルーツが溢れそうなくらいにふんだんに乗ったタルトが目の前に置かれた。

「夏美はタルトが本当に好きだよね」

嬉しそうにタルトを口に運んだ夏美に対して、思ったことをぼろりと言う。それに彼女は飲み込んでから返した。

「ケーキやデザートなら、何でも好きよ。でもタルトは特に好きってとこ。特にフルーツどっさりのものとか、つつい注文しちゃう。

——知っているわよ、洋がタルト作りを始めたって」

思わぬ言葉にドキツとしてしまう。その反応を楽しむかのように、夏美はにこにこしていた。

「すぐに顔に出るんだから。本当に隠したいのなら、もっと徹底的に隠しなさいよ。試作品はいつでも食べてあげるからね」

茶目つ氣ぶりに返すと、再び幸せそうな顔をしながら食べ始めた。改めて感情がすぐ顔に出てしまう、損な性格に落胆してしまいそうだ。夏の終わりには夏美の誕生日がある。そのためにと思って、喫茶店のおじさんに無理を言って教えてもらっているのだ。だが次第にその目的以上のために作っている洋がいた。

ケーキを作ることが楽しい。それを誰かに食べてもらい、嬉しそうな顔をしてもらえと思うと、さらに楽しくなってくる。こんな風に何かに夢中になるのは初めてだったのかもしれない。

今日も偶然にこの店に訪れたことにしていたが、本当は狙ってきたことであつた。話題のパティシエが作ったケーキ。それがどんなものなのかと興味があつた。

興味がそのまま将来に繋がるわけではない。だが、それでも気になり始めていた。それと同時に、身に入らなかったフランス語の授業もしっかり聞き始めていたのだ。

第4話 角砂糖が溶けるまで (3)

* * *

八月の終わり、洋は夏美の誕生日に夏にとれるフルーツを中心に使ったタルトを作り、それをプレゼントした。彼女はそれを笑顔で受け取り、そして非常に嬉しそうに食べてくれた。

ただし味に関しては少々厳しい内容で言及される。個人的にプレゼントをするくらいならいいが、もしお金を取って出すのなら、まだまだ出せるレベルではないと。

だが、美味しそうに食べている顔が忘れられず、機会があることに、様々な種類のケーキを作り、それを試食してもらっていた。

そのような感じで穏やかな日々を過ごしつつも、時はあつという間に過ぎ去り、三年生の後期へとなっていた。

秋も深まる中、世間では就職活動が始める季節。建築学科に進んでいた夏美はそのまま大学院に進むため、特に就職活動はしていなかった。一方、洋は学部で卒業予定のため、少しずつは始めていたのだ。

そんなある日、バイトの休憩中に洋は夏美から指摘をされた。

「どうしたの、何だか元気ないよ」

「そうでもないけど……」

「まだ就職活動も本格化していないのに、何だかやる気がないっていうか、諦めつついうか……。とにかく変」

夏美にばつさりと切り捨てられ、表情が固まる。特に表面に出して意識はしていなかったが、洋の心の深淵では密かなる葛藤があったのだ。

「どこの業種に進むとかは決めてないの？」

「まだ……」

「そんなに内気だと、面接とかで押されちゃうよ?」

「夏美なら、どんな状況でも押し込むよね」

「私のことはいいから。——何か悩みでもあるんでしょ。もう何年付き合っているのよ。何かあるってすぐにわかるんだから」

視線を逸らしている洋のあごを持ち、夏美自身の目線へと上げた。「いい加減に自分の中に溜め込むのは、やめなさい」

真っ直ぐな目で出される言葉。嘘偽りのない、ずっと洋が憧れていた目。

それに促されるように、言葉を漏らした。

「就職活動とは別に……自分の興味と実力を試そうかどうか迷っている」

「実力を試す?」

夏美は手を放し、口を開いた洋をじつと見た。真剣な目で見透かされ、自然と言葉が漏れてくる。

「——ケーキ作りやお菓子作りを本格的に勉強して、パティシエを目指そうかと」

誰にも言ったことがないこと。言ってしまうば、ほとんどの人には笑い飛ばされるか、反対されるか目に見えていたから、ずっと胸に秘めていた。だが、もっとも親しい女性になら言ってもいいと思っただのだ。

すぐには返答がない。だが、しばらくして夏美は笑いもせず、そして驚きもせず、ただ静かに笑みを浮かべたのだ。

「本当の洋の胸の内はそうだったのね。言ってくれて——ありがとう」

まったく予想外の返答だった。むしろ洋の方が呆然としてしまう。「何となく気づいていたわよ。あなたが喫茶店でバイトを始めて、ケーキやお菓子作りに興味を持ち始めた頃から。——その様子だと、自分以外に言ったのは私が初めてかな」

こくりと首を縦に振った。それを見るとまた嬉しそうに言葉を繋ぐ。

「目指してみれば、自分の夢に向かって」

「でも、そんな夢話、ほとんど無理に近いじゃないか。僕のことをよく知っている、夏美だから笑われなかったけど、たいていこんなことを言っても取り合ってくれない。普通の生活を過ごした方がいいって言われる」

「普通って、何？」

「だから会社に勤め、結婚して、ささやかな幸せを目指すことだよ。世の中には、もっとパティエに適した人がいるのに、ただ興味だけで進むのは……って思っている」

景気はあまり良くない世の中で、また別の道を一步踏み出すことをするには度胸が必要である。それがよりよい技術を要することになるのなら、尚更だ。

躊躇っていた言葉を口にするだけで、後悔も生じてしまう。ずっと自分の中で夢として閉まっておけばいい。そう——、思っていたはずだった。

「諦めの言葉を吐いている割には、決めかねた表情をしているのね」
「だから、ただの夢だって。——やっぱり何でもない。就職活動して、自分に少しでも合う会社を探すよ」

夏美から視線を逸らし、伝票を持って立ち上がろうとした。その時、急に手を捕まれた。華奢な手が必死に握りしめている。

「な、何するんだ。離してくれ」

「……諦めていいの。ずっとその大切な想いを一生無視し続けるつもり？」

徐々に声が大きくなっている夏美を見て、慌てて押さえようとす。周りの視線が少しずつ集まっていた。

「夏美、とりあえず落ち着けって」

「落ち着いているわ。ただ、ようやく求めていた夢を放り投げている人を見て、腹が立っているだけよ！」

さっと席を立ち、バックを引手繰って、足早に外に出て行ってしまう。そんな彼女の後ろ姿を見つつ、急いで会計を済まして追

かけ始めた。

夕暮れの時間帯になっており、足早に家へ戻る人々の影がアスファルトに映し出されている。小走りをし、長く延びる夏美の影に、そして彼女本人にも追いつき、手首を握って止めさせた。途切れた息の中、言葉を出す。

「待ってくれよ」

俯いたまま、彼女はぐっと口を閉じている。だが逃げようとはしなかった。

「……ごめん」

何とか口を聞いてもらおうと、振り絞って出てきた言葉は、ひどく簡素なものだった。何を言えばわからない、そんな状況だ。

「——どうして謝るのよ」

返された言葉に答えるのも困窮してしまう。

「ねえ、どうして」

顔を上げた夏美は、何の曇りもない目で見てくる。

「何もしていないのに、謝らないで。まだ迷っている途中なのに、どうして謝る必要があるの？」

そしてふっと顔を緩ませた。

「まだまだ私たちの人生はこれから。迷う日もあるけど、頑張っていこうよ。——ねえ、その夢、どうして追いかけないの？」

夏美は手を握り返し、突っ立っている洋を歩くよう促した。引っぱられるように連れて行かれる。

「どこに行くつもりだ？」

「喫茶店のおじさんも昔パティシエを目指していたんでしょ？ それならまずは話を聞いた方が早い。だから行こう」

少し強引で、不器用なやり方。だが、彼女なりの想いを込めているのだろう。その様子も洋が彼女に惹かれた一つだった。

夏美に言おうと思った瞬間から、その後の道行きは決まっていたのかもしれない。夢を諦めきれない自分がいることも後押しして。

その後、喫茶店のおじさんに話を聞いてから、洋の気持ちは確実にパティシエへと傾いていた。そしておじさんが昔勤めていたケーキ屋で、隙間の時間を使ってバイトをし始めることになる。

とても素敵なところであり、パティシエ志望の人もたくさんいたが、その店長はとても厳しかった。しかしその厳しさの中にも優しさが隠れており、誉められたときは嬉しく、毎日が勉強の日々だった。

就職活動もしていたが、パティシエを本気で目指したいと思い、意を決してやめたのだ。躊躇いがないと言ったらそれは嘘だろう。だが、そのおかげがすつきりした気分になったのも確かだ。

やがて四年の夏、筋がいいと誉められていた洋は、約一年である一定のものが作れるようになったら、留学や他の店での修業も検討しておくと言われたのだ。もしそれが達成できなかつたら、洋は今度こそその夢を諦めるつもりだった。

親には上手く言いくるめて、卒業後は語学留学すると伝えていた。それが純粋な留学となるか、それとも他も付随した留学となるかは洋の力量次第だ。

卒業論文の合間でひたすらケーキやお菓子作りの勉強をし、時間が確保できれば実際に作りもした。

そのような忙しい日々のため、夏美と会う時間も必然的に減っていたが、何一つ嫌な顔をせずに、洋の夢を見守ってくれていた。夏の暑い日にはむしろ湯を入れたり、本当に彼女の言動には、言葉にならないくらい感謝をしていたのだ。

そして、無事に卒論も提出し、卒業式を迎え、また新たな生活が

始まった。

夏美は大学院へと行って自分の研究に更に没頭し、洋もパティシエ留学を目標にひたすら頑張つて、それぞれ充実した日々を過ごしていたのだ。

そんな日がしばらく経つた夏のある日に――全ては崩れた。

* * *

非常に暑い日々が続いていた中、突然前線が来て、雨が降り止まない日だった。そのため外に出れば、少し肌寒い状態。だがそんなのも脇に置いておけるほどに、二人の心は満ち足りていた。

傘を並んで差しつつ、会話を弾ませている。

「本当におめでとう。無事に留学することが決まって」

「ありがとう。正直言つて、かなり驚いているよ。僕が行つていいのかつて、つい思つてしまう」

「いいのよ。少しはその謙虚さを置いて、堂々と胸を張りなさい」

洋の隣にはいつも支えてくれた小川夏美という、一人の女性。彼女のおかげで、留学まで辿り着いたと言つても、過言ではない。

そんな彼女とずっと一緒にいたい。だが、留学をしてしまえば、物理的に会えなくなる。

だから、その前に伝えたいことがあつた。

雨の中、赤信号を目の前にして立ち止まる。激しく往来する車が目に入った。

「なあ、夏美……」

「何？」

「僕がフランスに行つても、忘れないで、待つていてくれるかい？」
言いながら、手をぎゅっと握りしめた。どうしてこのタイミング

で言うのかよくわからないが、今言わなければいけない気がしたのだ。

視線を夏美へと移した洋の瞳には、目を丸くした彼女が映っている。啞然とした驚きか。

だがすぐに太陽のように燦々とした明るい笑顔を浮かべた。

「もちろん、待っている。だから、洋も私のこと忘れないでね」

それは一生忘れられなそうな笑顔だった。彼女の名前の通り、夏のように明るく美しい表情。それは確かに洋の胸に深く残ったのだ。やがて信号が青になった。洋たちが渡り始める前に、愛くるしい一人の少女が飛び出し、楽しそうに横断歩道を渡り始めたのだ。その少女の後ろからは母親らしき人が、そして他にも大勢の人が歩いている。

いつもと何も変わらない、一コマ——なはずであった。

渡っている途中で、誰かが大声で叫んだのが聞こえたのだ。何を叫んだのかすぐにはわからない。何事かと思い、振り返ろうとしたが、その前につんざくような強烈な音が耳に入ってくる。

その音の方向に向いたとき、洋と夏美の表情は固まった。そしてお互いの存在を確かめるよう、手をしっかりと握りしめたのだ。

そして——、その後の洋の記憶はしばらく途切れる。

* * *

次に洋が目覚めたとき、何重にも包帯に巻かれた右腕があった。そして心配そうに見つめている、横断歩道で見た少女のまん丸の目。その子も腕が包帯で巻かれていた。

まず気づいたのは、ここが病院であるということ。そして何かが

起こったということだった。

しばらくは何も状況が掴めなかった。だが、目が覚めた後で洋が知ったことと、新聞で読んだことを合わせるとこういうことである。ある昼下がりの時間帯に、次々と人々をはね飛ばしていったトラックがあつた。運転していた男の狂気は止まることを知らず、多くの人々に怪我を負わせ、そして命を奪いもした。その中に洋たちも含まれていたのだ。

幸い命は助かった洋だが、腕に大怪我をしたためしばらくは以前のように使えず、ある程度リハビリが必要と言われた。

それはまだよかった。事情を話して、留学を延期すればいい。

だが、怪我など忘れてしまうことが起きていたのだ。

ずっと憧れて、大切な人であつた夏美はすでに洋の手の届かないところに行つていた――。

第5話 夏の太陽の下へ (1)

「その後、僕は怪我がなかなか回復せず、数ヶ月お菓子作りから離れていたら、以前のようにには作れなくなっていた。急激に上達したから、その反動もあつたみたいで、そのため留学は諦めた。そして喫茶店のおじさんが、家庭の事情で田舎に引越すことになり、喫茶店を継ぐ人がいなかったため、僕が引き継いだ。——それがこの喫茶店の始まり、ソレイユ・デ・レテの始まりだよ」

静かに言い終わる洋に、一同は顔を俯けて、黙り込んでいた。笑顔で振る舞っている彼の裏に隠された過去。それを聞いて、何を言えればいいかわからなかった。

「——別に僕はこの喫茶店を好きで開いているわけだから、とても楽しい日々を過ごしている。だからそんな顔をしないで。こっちが申し訳なくなってしまうから」

静かな微笑みが逆にとても胸に突き刺さった。無理しているのはわかっていて。だが、洋のような状況に陥ったことがないから、返す言葉さえ見つからなかった。

雨の音が徐々に小さくなっている。激しい夕立もそろそろ止むのかもしれない。

洋が動かない三人のコップに水を注ぐと、恐縮したように首をすくめる。促されるままに、ようやく水に口を付けた。

話を聞いているだけであつたが、かなり緊張をし、喉が渴いている。水が体内に入ること、ようやくその平静さを取り戻しつつあった。

「ねえ、もう六時をかなり過ぎているけど、大丈夫？」

無言のままの光二、義樹、水菜の顔を見比べながら、尋ねてくる。よく見れば、六時どころか、七時も過ぎていた。

「……そろそろ帰ろうか、二人とも」

光二はようやく口を開いて、義樹と水菜を見た。その言葉に対し

て軽く頷き返される。

そして三人は重い腰を上げて、重苦しい気分が回復しないまま、店から出ていった。

雨はかろうじて止んでいた。だが、未だに分厚い雲で覆われている。水溜りには星や月は映っていない。まだ晴れないようである、その想いとともに。

* * *

それから五日間ほど、喫茶店はお盆休みを取っていた。光二にとっては、塾もなく、喫茶店にも行かない日など久々だ。

少しのんびりしつつも、文房具などを買い足す必要があったので、学校帰りによく通っている文具屋へと自転車走らせた。

通い慣れているところだから、どこに置いてあるかはすぐにわかる。てきぱきと選んで、店から出ると偶然にも私服姿の部活の後輩に出会った。

「高山先輩、お久しぶりです！」

「久しぶり。練習は盆で休みか。頑張っているか？」

「はい、何とか。でも三年の先輩たちがいなくなってとても寂しいですよ。俺たちがいかに先輩たちに頼っていたか痛感します」

「俺たちも一年前はそうだったさ。まあ時間が経てば、そのうち慣れる。それまでの辛抱だ。応援しているから」

「ありがとうございます。高山先輩も松原先輩も気にかけてくれて、本当にいい先輩たちです」

嬉しそうな顔をしている後輩を見つつも、意外な言葉に驚いた。

「松原……先輩？ あいつ、何かしたのか？」

「え、知らないんですか？」

きょとんとした表情をしている。松原は義樹の名字だ。彼が誰か

に対して気にかけているなど、ほとんど聞いたことがない。だから次の内容を聞いて、すぐには思考が繋がらなかった。

「松原先輩、俺たちが負けた後も、県大会を観に行つて、色々データを取ってくれたんですよ。だからこれからの試合、それを元にして対策を立てられそうです。先生も誉めていました」

「そ、そうか。それはよかった。次の試合、俺たちの代以上に頑張ってくれよ。それじゃ」

見送る後輩を背にして、光二は悶々と考えながら歩き始めた。

義樹がそのような行動をしているとは思わなかった。だがあの後輩が嘘を吐いているとは思えなかった。だからおそらく事実であるのだろう。それならその理由が気になる。

光二たちが負けた後の県大会、それはつまり洋たちと出会ったばかりの頃。そんな日に、義樹はそんなそぶりを見せたのだろうか。

しばらく記憶を巡らせていたが、はっとして立ち止まる。

——そうだ。俺は塾の休憩中に義樹の姿を見たんだ。あの方向から察すると、大会会場と考えても筋が通る。

起きた事実を改めて理解した。しかし、それなら何故という疑問が渦巻く。

「どうしてサッカーの試合を。あいつは言ったじゃないか、これでサッカーは終わりにするって」

引退試合の後、義樹と一緒に帰っていた光二に対して、投げやりにそう言っていた。光二の目は見ずに、ただ視線を空の彼方に向けて。

——あれは嘘だったのか？

「……何がなんだがわからない。俺だって、自分のことで精一杯なのに。どうしてあんなどうでもいいやつなことなんか……」

必死に頭を横に振りながら、次々と出てくる疑問を振り払おうとする。だが、考え始めたら止まらない。

とにかく今は家に帰ろうとした。大通りの多い交差点にて赤信号で待たされているときも、ただ虚ろに視線を前に向けているだけ。

やがて青になり、またすぐにペダルを漕いで、走らせようとした。

「光二！」

しかし突然の呼び声に、思わずブレーキをかける。次の瞬間、勢いよく走り去っていく自動車が見界をかすめた。

凄く速さだった。余裕で制限速度を越しているだろう。信号無視で速度違反など、どれだけ運転手は規則を破っているんだ。

始めは頭に血が昇っていたが、少しずつ頭が冷えてくると、手が震えていることに気づいた。

もしあの速さの自動車に跳ねられたら――。

それが脳裏によぎると、心拍数が急激に上がっていく。ただ一瞬気がそれただけなのに、それによって命を亡くしそうな状態になるなど、考えたくもない。

「高山君……」

さっき呼び止められたのと同じ声がまた聞こえてくる。後ろを振り返ると、水菜が息を切らして走ってきていた。

「鈴原？」

「何をぼさつとしているの、危ないでしょう。それとも死にたいの？」

「違う。ただ……」

「それに腰抜かしているんじゃないわよ。近くに公園あるから休みましよう。とりあえず、自転車から降りて」

自分の手が自分でないような感覚に陥りながらも、ゆっくりと降りる。すると水菜がハンドルを取り上げて、転がし始めた。その様子をぼかんとして見ていると、きつい目を送られる。

「ほら、行くわよ」

「あ、ああ」

叱咤されるままに導かれると、すぐに小さな公園に着いた。住宅街の一角にある公園で、盆で帰省している人もいるためか、あまり人はいない。

ベンチに座るよう促され、座り込むと緊張の糸が一気に切れた。全身の震えが止まらない。思考が上手く回らないが、まさかの事態に思わず苦笑いしてしまう。

ふとひんやりしたものが、手の甲に乗った。

「大丈夫？ ほら、お茶。これでも飲みなさい」

いつのまにか自動販売機で買ったのか、冷えたお茶のペットボトルを水菜から手渡される。それを有り難く受け取り、キャップを空け、喉に通した。緊張も共に流してくれそうだ。

水菜も隣に座り、同じお茶を飲んでいる。彼女は口を開かず、ただ黙り込んでいた。

「鈴原、ありがとう」

「何が？」

「止めてくれて」

「あんなに様子がおかしい人、誰でも止めるわよ。今度からはもう少し気をつけなさい」

さも当たり前のように受け返す。そのうんざりとしている横顔を見て、ようやく光二の中で欠けていたピースがはめ込まれた。

「鈴原水菜……、違う。関口水菜」

呟いた言葉に反応して、水菜はびくつとする。そして飲んでいたお茶のペットボトルを脇に置いて、肩をすくめつつも満足そうな顔をした。

「ようやく気づいたのね、光二。時間かかりすぎなんじゃない？」

その言葉を聞いて、光二の記憶のピースが正しかったことを認識する。

「別に忘れていたわけじゃない。ただ名字も、外見もこんなに変わっていたら、気づかないだろう」

「その変わり用はどういう意味で？」

無邪気に聞いてくる少女に対して、はあつと息を吐き出した。

「……いい意味だよ。随分女らしくなったじゃないか」

若干とげを加えつつも言ったが、どうやら肯定の意だけ捉えたら

しい。ご機嫌な様子だ。

関口水菜——光二と小学校二年まで遊んでいた幼なじみだ。今よりもさらに明るく行動的で、男に対しても自分の意見や行動を貫き通していた少女。

だが三年にあがる前に、両親の事情で引越してしまったのだ。

連絡先を聞き忘れたため、音信不通状態。機会があれば会えるかもしれないと思つたが、まさかあの喫茶店を通じて再会するとは、世間は狭いものである。

「ちよつと事情が重なつて、お父さんの姓からお母さんの姓に変わったんだ。それでいろいろとあつた後に、またこつちに戻つてきたわけ」

「いつ戻つてきたんだ？ 俺の家の連絡先くらい知っているんだから、一声かけてもいいだろう」

「中二に進級する前にこつちに來たわ。けど連絡しようと思つても忙しくつて。住所も今度は駅の反対側で、中学校も違ふし。それに光二、手紙や年賀状は出すつて言つたのに、一度もくれなかつたじゃない！」

「引越し先の住所知らなかつたんだよ。それに小学校の時とか手紙を書くの、照れるじゃないか」

顔を俯かせる。頬が暑さだけでなく、それ以外のことも要因として赤くなっている気がした。

その様子を見た水菜は肩をすくめながら、座り直す。

「まあ、偶然にも再会できたからいいか。洋さんや恵美香、それに松原に感謝しなくちゃね」

「いや、義樹に感謝する必要はないから」

義樹がその二人と同列に並べられるのはどう考えてもおかしいだろう。

そういえば水菜は義樹と部活について、話を交わしたことがあつたのを思い出した。

正直言つて、光二の中では考えがまとまりつつあるのだが、念の

ため誰かに聞きたかった。

「なあ、水菜、未だに引退したスポーツの試合を見ているのって、未練がある証拠だよな？」

話題が変わった内容に水菜は目を瞬かせた。

「まあ時と場合によるんじゃない？ あとはその時の心情とか。けど自分が勝ち残る予定だった試合を見たとかなら、未練がましいわよね」

「そうだよな、ありがとう」

そう言っていると視線を下ろし、じっと地面を見つめた。

色褪せた土の上で、蟻が何かを探して走り回っている。上からは燦々と照りつける太陽。何をそんなに必死に求めているのだろうか。水菜はお茶を飲みながら、深刻そうな顔をしている光二を横目で見る。そしてふと顔を緩ませた。

「光二は何だかんだ厳しいことを言っても、松原のことが気になるのね」

「はい？」

顔を上げると、水菜が優しい表情をしていた。

「きつと松原も何か葛藤があるんだよ。未練を作るなって言うのも無理だけど、いつまでも過去を引きずるべきではない。前に進まなくちゃいけない。——洋さんも、そして光二もそうでしょ？」

——気づいているんだ、水菜は。俺が進めないことを。

久々の再会ではあったが、この幼なじみは光二のことを的確に見抜いていた。いや、もしかしたら気になって意識して見ていて、気づいたのかもしれない。

事故にあいそうだった衝撃もいつしか和らぎ、鼓動が落ち着いてきたところで、光二は立ち上がった。

「義樹から話、聞いてみるよ。話してくれるかわからないけど」

「そうね、それがいいわ。無理だったら喫茶店に来て。洋さんや恵美香が聞き出してくれると思うから」

光二は水菜を見ると、わかったと頷き返す。

太陽の下で少しずつ光二の心の中では、何かが消化され始めていくように感じられた。

光二は水菜と別れてから、その足で義樹の家に向かった。よくゲームをしに遊びに行っていたため、場所は知っており、すぐに着いた。

だが家の中は暗い。電気は点いておらず、人の気配はないようだ。念のためにインターホンを鳴らす、出る様子はない。

「そっぴゃ、親戚の家に行くっていった気が……。忘れていた。盆明けたら、喫茶店に行ったときにでも聞き出すか」

汗を流しながら、とぼとぼと自転車に跨った。

——義樹だけでなく、自分のことも見つめ直す必要があるか。

少しは一度将来について立ち止まってみようと思っていた。勉強をすること、そのものについても。

やがて太陽を背にして、帰り始めた。

第5話 夏の太陽の下へ (2)

* * *

お盆はあつという間に終わろうとしていた。翌日からまた講習があると思うと、鬱になりそうである。だがその前に、喫茶店の盆休みは終わり、再開していた。それだけが唯一の救いなのかもしれない。

昼を少し過ぎたあたりに光二は行つたが、予想以上に混んでいた。仕方なく椅子に座つて待とうと思つた矢先に、軽やかな声が飛び込んでくる。水菜が光二の姿を見つけて、手を振って呼んでいたのだ。その前で恵美香が微笑んでいる。近寄ると、四人席のうちの一つを空けてくれた。

「思つたより遅かつたわね」

「お久しぶり、高山君」

水菜と恵美香が次々と挨拶していく。昼前からいたのだろうか、サンドイッチの皿はすっかり空になっていた。それを見つつ、水菜の隣に腰を下ろす。

「いや、そっちが早いんだろ。いつも俺は昼過ぎに来ているじゃないか」

「あのね、高山君、今日も私が水菜に無理を言つて、早めにしてもらつたの。洋さんとじっくりお話しがしたくて」

恵美香が手を合わせながらにっこりとする。そして二人を見比べながら、嬉しそうに口を開いた。

「それにしても二人が知り合いだなんて、知らなかったわ。しかもこの水菜がずっと気にかけていたなんて。とても小さい頃は仲がよかったのね」

「恵美香、何が言いたいの」

「別に、何でもないわよ」

ニコニコしつつ、含みのある顔をして、適当に流していた。

——絶対楽しんでいる。

そう光二は感じ取った。これがもし義樹にも知られたら、何を言われるかたまったものじゃない。絶対に冷やかしくくるだろう。

光二にとって水菜はただの幼なじみである。だから、それ以上でもそれ以下でもないと思い込ませていた。

光二が注文した飲み物が来て、盆の最中の話しも一通りすんだ頃、義樹もようやく喫茶店に顔を出した。日焼けの様子が一段と濃くなっている。

「恵美香ちゃん、久しぶり！ 元気だった？」

「ええ。義樹君も元気そうね」

「君に会えただけで、十分さ！ 恵美香ちゃんが元気なら、僕も元気！」

いつもより度を越えた挨拶を交わしながら、苦笑いをしている水菜と光二を見てきた。

「よう光二、元気だったか？」

「お前と会わなかったおかげでかなり平和だったよ。焼けたな、海にでも行っていたのか？」

「プールに行ったり、従兄弟とサッカーしててさ」

「へえ、サッカーをまだやっていたのか。もうやらないって言うていたじゃないか、引退試合の後」

「軽く体を動かす程度ぐらいいいだろう」

視線を逸らし、義樹は洋が持ってきた水を受け取る。

若干おかしい様子を見て、ちらりと光二は水菜を目配せすると、彼女は軽く頷いた。そして恵美香の隣で顔がにやけている少年に対して、思い切って切り出す。

「なあ義樹、俺たちが負けた後の試合を見に行っていたと聞いたが、いったいどうしてだ？」

直球で質問したが、意外にも義樹はすつとぼける。

「はあ、試合を見に行った？ 何をでたらめなことを」

「でたらめじゃない。試合の様子をメモしたのを先生や後輩たちに託したって、直に聞いた」

すると義樹の表情に、ようやく困惑した様子が浮かび上がった。

「聞いただと？」

「ああ。先生にも確認は取った」

はつきりと言ったものの、これは嘘である。確認をしようとしたが、連絡が通じなかったのだ。つまりあの後輩の証言しか聞いていない。

「サッカーはもうしないって、あんなにはつきりと俺に言い切ったのに、どうしてそんなことを」

「別に気紛れさ。後輩たちに頑張ってほしいから、しただけさ。もう——するかよ、あんなスポーツ」

そっぽを向いて返す。だが声色を通じての感情は丸だしかった。

「サッカーが好きなのに、何を寝ぼけたこと言っているんだよ。あの結果に不服なんだろ？」

「……光二、何が言いたいんだよ」

ギロリと鋭い視線を向けてくる。それに圧倒されないよう、自信をしっかりと保つようにした。

「だから言っていることと、やっていることが、正反対なんだよ。

何だよ、もうやらないって言うておきながら、未練たらたらで。続けるなら続ける、そうはつきり言えよ！ サッカー続けることが悪いことなんて——」

「お前に何がわかる！」

急に立ち上がり、前のりに飛び出して、義樹は右手で光二の胸倉を掴んだ。目の前に彼の顔が飛び込んでくる。

「俺がどれだけ練習を頑張って、最後の試合を向かえたかわからないくせに、わかったような口を開くんじゃねえ！」

真っ直ぐに光二を見て、言い放つ義樹。それはきつと彼の真実。だが、それを素直に受け入れられるほど既に光二は我を保っていない

かった。

「お前がどれだけあの試合に賭けていたかはわかってるつもりさ。ずっと練習していたからな。だからわからない。どうして好きだったことを無理にやめようとしているんだよ！」

思いついた言葉をどんどん声にしていく。周りのことなど気にせず、思っていたことをそのまま露わにする。

そして、それを聞いて、さらに抑えられない気持ちの沸点に到達した義樹は左手でも光二を掴み、無理矢理立たせた。

「いくら好きでも、いくら練習しても、いくら自分なりに上手くなっても、勝たなきゃ意味がないだろ！ 所詮俺は弱小チームの中じや上手くても、全国的に見たらたいしたことねえ。それがわかっていて、続けてられるか！」

感情をむき出しにした言葉は、そのまま義樹の心を意味していた。だが、それがむしる無性に腹が立ったのだ。

「——そうか、お前のサッカーへの想いはそんなものなのか。技術が足りないから、そしてそれに対する努力もしようとしなく諦めるなんて、なんて薄っぺらいものなんだよ！」

「……う、うるせえ！」

吐き捨てた言葉と共に、義樹は思い切り光二を押し出した。何の防御もしていなかったため、背中に椅子が直撃してしまう。うめき声を上げつつも、視線は義樹へと行く。

彼は光二を叩きつけると恵美香や水菜の制止も聞かずに、一目散に喫茶店の入り口へと向かう。そしてちょうど中に入ってきた女性の肩に当たりつつも、何も言わずに出て行ってしまった。

喫茶の中にいた人はあまりの出来事に呆然とする。だが、すぐに現実に戻り、自分たちの世界へと戻っていった。

「光二、大丈夫？」

光二の隣から心配そうな声が聞こえてくる。

「だ、大丈夫。意外に俺は頑丈だから。殴りあいもしたことはあるし。心配するな。ただ少し痛いだけ」

背中に痛みが走るが、しばらくすれば抜けるだろう。一連のことを見ていた洋も視界の端から近寄ってきた。

「光二君、無理してない？ 痛いところはない？ 横になるなら、奥に休めるところがあるから」

「……ありがとうございます。大丈夫です、お気遣いなく。それよりも、義樹の逆鱗に触れた方が心配だ」

あんなに激怒したのは初めてだ。もしかしたら、触れてはいけないところを直に触れてしまったのかもしれない。

恵美香は両手を強く握りしめ、何かを考え込んでいた。そして机に手を乗せながら、立ち上がったのだ。

「私、義樹君のこと、追っかけてくる」

「恵美香？ またどうして。大丈夫よ、ああいうやつは寝れば忘れるタイプだから」

「いえ、いつまでも引きずるタイプよ。光二君、彼どこに行きそうかわかる？」

水菜の言葉にもほとんど傾けず、恵美香は混じりけのない真っ直ぐな目で見てきた。

「家か、もしくは学校か。サッカーのこと話題に出したから、おそらく」

「わかったわ、ありがとうございます。高山君はゆっくり休んでいてね」

鞆を持ち、恵美香が歩き始めようとすると、目の前にさっきの女性が立ちはだかる。バレッタで髪をまとめあげている女性——夏美の妹の晴美だった。

洋は彼女を見て、困惑をした表情になる。恵美香はちらりと彼女と視線が合うと、軽く会釈をして脇を通り抜けた。

そして晴美は立ちすくんでいる洋を見つつも、喫茶店内をぐるりと眺めた。

「まだお忙しいようですね。お時間が空きましたら、話をよろしいですか？」

「……構いませんよ。あまりお話することはないと思いますが」

「それでもいいわ。ただあなたの奥底に埋まっているものを引き出してみたいだけなので」

そう言うと踵を返し、空いていた二人席に向かおうとした。

だが、振り返った瞬間、彼女や光二たちは視線の先にあるものを見て凍り付いた。

入り口付近に青年が立っている。晴美が来た後に入った客だろう。不格好なサングラスをかけ、全身黒い服を着ている。

その人が恵美香の首に手を回し、鋭利なナイフを突きつけているのだ。

「え、恵美香……？」

立ち上がろうとする水菜を見ると、青年は大声で叫んだ。

「動くな！ この小娘の命が欲しかったら、俺の言うことを聞け！」
水菜はびくりとし座り込み、肩を震わせながら恵美香をじっと見つめていた。

喫茶店の中には光二たちと晴美、仲のいい男女とおばさんたち、そして女子高生がいたが、誰もが思わぬ光景に息を呑んでいる。

恵美香はきつく首を絞められているのか、苦しそうな顔をしている。青年の目や雰囲気からも殺気立っているのはわかった。

彼は何かをしようとしている。

そのためには恵美香を傷つけるのは造作もないはずだ。幸か不幸か、今、この状況を見て、大パニックになる少年がいないのが救いだったのかもしれない。

洋は晴美を脇に寄せ、少しだけ彼に近づいた。動いたのに気づいたのか、青年の顔がこっちに向けられる。ごくりと唾を呑んで、洋は先に口を開いた。

「この店の店長だ。何が目的かは知らないが、まずは彼女を放してくれ」

「今、放したら、ナイフを突きつけている意味がないだろう。そんなこともわからないのか、上原陽洋」

洋の眉間にしわが寄る。この喫茶店に来る人は、あまり彼の本名

を知らない。ましてやこのような青年に話したことはないのだろう。だから知っているとするれば、もっと昔の知り合いか。

「君はいつたい……」

「俺のことを忘れたのか？ 同じ読み方だったのにさ。まだ卒業してから七年ばかりしか経っていないのに、冷たい奴だな」

その言葉を聞いて、洋の顔が一瞬で変わる。そして確かめるように、一音一音はつきりと口を開いた。

とだあきひろ
「戸田明裕……」

そう言つと、青年の口がつり上がった。

第5話 夏の太陽の下へ (3)

洋が名前を当てても、特に彼の動揺は見られない。始めからわかるのが当然なのか、もしくはわかってこそその犯行なのだろうか。

どちらにしても、恵美香の身が危ないのには変わりない。ナイフを喉元に当てられた少女は何も言わずに、齒を噛みしめている。

青年——戸田明裕はサングラスの奥から洋を睨みつけた。

「こんなところで喫茶店を開いているなんて、知らなかったよ。君はとて有名で偏差値の高い大学に進学したから、その後も大手企業に就職したかと思った」

「明裕、何が言いたい。そんな話、こんなことをしなくてもできるだろう。お願いだから、彼女を放してくれ」

「断る。おおつと、あまり近づかないでくれ。可愛い小娘の顔に傷が付くよ？」

ナイフの先端を恵美香の頬に触れさせる。冷たくも恐ろしいものが、彼女を恐怖でくませていた。

「……何が目的だ。悪いが微々たるものしか金なんてない。だがそれでもし彼女が助かるのなら渡す」

「——そうだな、とりあえずお前と話がしたい。他は邪魔だ。とつとと出ていけ」

そう明裕は言いながら、ぐるりと店内に残っている客を見渡す。見られた人々はぎよつとしながら、急いで支度を始めた。

一方で水菜は動こうとしない。何を言われても最後まで残っているつもりなのだろう。

明裕はナイフを使って指図をしながら、残っていた客に外に出るよう促している。

「警察には連絡するなよ。連絡したら、この小娘の首に赤い線が走る。どうせお前たちには関係がないことさ。何もしなければ、俺もお前らや小娘に対して何もしない。それで十分だろう」

びくびくとしつつも、首を縦に振って肯定の意を示す。そして残っていた客は足早に去っていった。

ふと視線が座っていた光二たちに向けられる。

「お前らも出ていけよ」

「……断るわ。大切な友人に何かしないよう、見張っていないきゃいけない」

手に汗を握りつつも、勢いに負けないように水菜は答える。

「ふうん、友達か。まあいい。時間も無いし、すぐに終わるから、大人しく傍観しているよ。その男も」

逆らう気などあるわけない。固い表情で頷いた。そしてようやく明裕の視線が洋へと戻ってくる。サングラスを外すと、一同は目を丸くした。そこには以前営業に疲れてやってきた青年の顔があったのだ。そんな驚きも気にせず、明裕は言葉を発した。

「さて、久しぶりだな、洋。葬式以来だから、三年ぶりか？」

その言葉を聞いた晴美の表情が強ばる。洋の過去話から推測すると、明裕が言っているのはかつて恋人であった夏美のことだろう。洋の表情はさらに険しくなった。

「そうだね。三年前はあまり話さなかったから、正直よく覚えていなかった」

「そういえば、ずっと暗い顔をしながら、立ちすくんでいたな。――まったく、俺が晴美から手を引いたがために、あんなことになってしまったなんて、何て不運な女性だったことか」

「手を引いた……？」

「はあ、何も知らずに付き合っていたのか？ 俺は彼女から告白されたが、お前のことを知って、断ったんだぜ？」

洋の表情が豹変した。それを見つつも、光二は晴美の様子を垣間見た。彼女の表情はなお怪訝そうであった。

どうやら今の発言は嘘の可能性が高い。だがなぜこんな嘘を吐く必要があるのだろうか。

そんな考えを巡らしている中、明裕は洋の過去に背負っているも

のを深くえぐる、決定的な言葉を放った。

「どうせ夏美はお前と一緒にいたがために事故にあったんだろ。お前のせいで夏美は死ん——」

「いったい何を根拠に言っているのよ！」

突然の大声に、びくつとしながら光二は隣を見ると、水菜が机を叩いて、その場に立ち上がった。

「あれは事故だったと聞いたわ。その原因は事故を起こした人にあるでしょ！」

「君はまだ人生を歩んできた道が少なすぎるようだね。あまりすぐにかつとするはよくないよ」

明裕は面白くなさそうな表情をして、ぐいっとナイフを恵美香に近づけた。それを見ると、彼女は悔しそうに口を閉じる。

「……それで、何がお望みなんだい？」

洋は視線で水菜を静かに宥めながら、感情を抑えた声を出した。

「いや、別に。幸せそうに生きているお前がただ憎たらしかっただけさ。その人生をちよつといじってやろうと思って。……そうだ、よかつたら紅茶でも淹れてくれよ」

明裕はそう言いながら、ちらりとカウンターの方へと視線をやる。それに対して洋は大人しく従い、カウンターへと行くと、水を入れて温め始めた。

火をじつと見つめながら、洋は明裕に背を向けている。考え込みながら、泡のように吹き出るものを抑えていた。

いったいこの状況をどうすればいいのか。彼の目的がはっきりとわからないし、恵美香もいるため迂闊に動けない。

だがその時、場違いなことにドアベルの音が鳴り、それと同時に少年が一人入ってきた。

「恵美香ちゃん！」

思わぬ珍客に明裕や他の人の気がそつちに向く。

その時、ふいに明裕の体が宙を舞った。

そして音を立てて、背中から床に叩きつけられたのだ。

一瞬の突飛な出来事に一同は啞然としてしまう。

よく見ると、恵美香が彼の腕を両手でしっかりと持っていた。

「え、池中……？」

思わず小さく声を零してしまう。呻き声を上げている明裕を険しい目で見ていた恵美香は、急に手を離し、彼を飛び越えて義樹の元に駆け寄った。

「義樹君、急にどこに行っちゃったのよ」

「ご、ごめん。つい勢いに乗って」

「みんな心配していたんだから！」

「だ、だから、ごめんって」

義樹が半分おどけながら恵美香と話している。しかしどこかぎこちない。心ここにあらずといった様子にも受け取られる。

光二もよく状況が把握できず、頭の中がパニックした状態で、何気なく水菜を見ると、彼女は溜息を吐いていた。

「えっと、あれは……」

「見た通り、恵美香がやったのよ」

どうやらさっきの出来事は見間違いではないらしい。つまり恵美香は明裕を――背負い投げしたのだ。

緊迫していた空気が緩み、穏やかな雰囲気流れる。だが次の瞬間、晴美が息を呑んだ音が聞こえた。その先には、いつのまに起き上がりカウンターの向こう側へと飛び越えた明裕が、洋に向かってナイフを突きつけているのだ。

その先端を洋はただ無表情に見つめている。

「どうして、どうしてお前ばかり！」

「何か不満があるのなら、僕に当ててくれて構わない。それで気が済むのなら――」

「その偽善者ぶる様子がム力つくんだよ！」

一瞬間を置いて、明裕は続けた。

「自分が犠牲になればそれでいいのか。それなら晴美はどうして、死んだんだ！」

「それは僕が悪い——」

「違うわ、洋さんのせいじゃない！」

少女の悲痛な声が洋の言葉を遮った。

義樹は叫んだ少女の背中を驚きながら見る。その背中では震えていた。

「あの時の事故を何も知らないで、勝手に考えを巡らさないで！

それに洋さんも洋さんよ。どうして事実をはっきり言わないの。そんな風に生きて欲しいなんて、夏美さんは思っていない！」

恵美香はいつも着ていたカーディガンを脱いだ。その右腕には生々しい傷の跡が残っていた。そしてその部分をさすりながら、顔を青くして口を開く。

「あの時の事故——、今でも覚えている。轟音が鳴り響く中、夏美さんたちがとつさに私を押してくれた。そのおかげで私は軽傷で済んだわ。けど洋さんは重傷、そして夏美さんは……。……本来なら私が責められるべき立場よ」

だが二人に対して鋭い視線を送った。

「だけど私はその得た命を大切にしたい。そして悔いた過去を、これからのために生かしていきたい。過ぎ去ったことはもう戻れないだからいつまでも引きずっていたり、勝手に自分の妥協点を見つけたりして、さらなる高みを持って未来へ目を向けられない人がいいはずがない！」

その言葉はぐさりと光二の心に刺さった。周りを見渡してみれば、義樹や洋も唇を噛みしめている。

恵美香にとつて、その事故の出来事は衝撃過ぎてかなり精神的にも参っただろう。それでも前を向いて歩いているのが、本当に眩しすぎた。

大人にも成りきれていない彼女なりの持論を出すまでに、様々な想いの交錯があったはずだ。もしかしたらまだ迷っている途中なのかもしれない。しかし、その等身大の真っ直ぐな想いは、そのまま人々の心に焼き付いた。

「戸田さん……でしたよね」

ずっと黙っていた晴美が急に口を開いた。

「夏美姉さんのこと想っていらっしやったみたいですが、それは片思いだったのでしょうか？ それなら、彼に当たるのはお門違いかと思えます。それとも——」

数歩近づき、はつきりと明裕の表情が見える範囲まで行った。

「ただ単に自分が持っている不幸を、当てつけにばらまこうとしているのですか？ お仕事や交流関係で上手く行かなくなったために明裕の眉間にしわが寄る。凶星なのかもしれない。前に会った時の彼は非常に疲れている様子であつた。何かあつたに違いない。」

しばらく黙りこんでいたが、やがて明裕は息を吐き出し、やれやれと肩をすくめる。

「そうさ。自分一人だけ不幸なのも嫌だから、少しだが幸せそうに生きているこの男を見て、無性に腹が立つたのさ」

「特に人を傷つけようとしないとこを見ると、せいぜい評判落ちを狙っていたのかしら」

「それもあるが、もっと根本的なところもある」

すると目を見開き、呆然と立っていた洋に向かってナイフを振りあげた。

洋は思わず避けようとしたが、狭いカウンター内ではよく動けない。反射的に横に逸れるしかできなかった。

気が付けば後ろから義樹や恵美香が、明裕を取り押さえようとしている。

それに続けと、光二も勇気を振り絞って近づこうとした。

だが二人の争いの最中に、火を沸かせていたポットが床に落ちた。その衝撃で炎も共に、床のマットへと飛び散ったのだ。

すぐに火はマットを燃やし始め、さらに大きくなるうとしている。異変に気づいた光二や水菜、そして晴美はすぐに消そうと試みた。だが水があるカウンター内では、洋と明裕が対峙している。他に消すものと、辺りを見渡した。

一方で、二人も炎には気づいているはずだが、動こうとしない。そして義樹と恵美香も炎に妨げられて、彼らに近づくに近づけなかった。

ナイフの出方を見ている洋に明裕は囁きかける。

「いいのか、大切な喫茶店がなくなってしまうよ」

「大切……か。確かに思い出も詰まった大切な場所だが——」

何かに対して躊躇った洋は視線を下ろしたが、それによって隙が生まれる。明裕はその隙を突こうと、ナイフを突きだした。

恵美香が声を最大限使って叫んだ。

義樹も必死に手を伸ばそうとしたが、間に合わない。

瞬間的に水菜は目を瞑った。

だが、ただ呆然とその光景を見ていた光二は、一部始終をじつくりと見ていた。

ほとんど抵抗しなかった洋が、その切っ先に向かって左手を伸ばし、ナイフをしっかりと握りしめたのだ。

「——それ以上に大切なものは、僕の心の中にいつまでも残っている」

その言葉共に、洋の瞳には迷いが消え去ろうとしていた。

握られたナイフからは血が滴って床に落ち、次第に量が多くなっていく。だが洋は顔を歪ませることなく、握っている。

予想外の抵抗に明裕はナイフを引き抜こうとした。だが強く握っているためか、さらに血が溢れでるだけで、引き抜けない。

「な、何するんだ。放せよ。大人しく刺されるよ！」

動揺が言葉となってすべて流れ出てくる。洋はただ静かに呟いた。「別に僕に恨みがあるのは構わない。でも、君が犯罪者にはなっていない。どんなに辛くても、どんなに苦しいことがあっても、それだけは進んではいけない道だ」

「わかったような口を叩くな。所詮こんな喫茶店で人生を終えるやつにはわからないことさ！ 社会がいかに残酷で、救いもないことに。使えないと思えば、切り捨てられる。——そんなことをわから

ないお前が、何を言う権利がある！」

「そのことを言う権利は僕にはない。でも、君がしていることはやっつてはいけないことだ。それを止める権利ならある。きっと夏美もこうするはずだから」

夏美という言葉を出すたびに、苦い顔をしていたが、今は少しずつ変化が生じていた。しつかりと現実を見つめなおそうとしている。そして、絶望を感じつつも、少しだけ前を向いて生きようとし、それを他人にも共有して欲しいと気持ちも伝わってきた。

しばらく拮抗状態が続いたが、やがて明裕はナイフから手を離し、憑き物が取れたように、その場にしゃがみ込んだ。洋が握っていた血みどろのナイフは床に音を立てて落ちる。

そして晴美はようやく見つけた備え付けの消火器の元に飛びつき、急いで火に対して振りかけた。大きく成りつつあった炎だったが、少しずつ小さくなり、ようやく消えた。それを見届けると、晴美は近くの机に寄りかかりながら、ほっと一息吐いた。

一区切りついた所で、戦意が消失している明裕を飛び越えて、恵美香が焦ったように洋の元へと近づく。

「洋さん、なんて危険なことをするんですか！」

滴る血を見ながら、青ざめた顔で言う。

「恵美香ちゃん、そういう君だって危ないよ。いくら柔道で段を持っているからって、ナイフを持っている相手に技をかけるなんて。」

「あれはきちんと計算してやりました。とにかく止血しましょう。」

「いや、大丈夫。自分で病院には行く。なるべく騒ぎにはしたくないから」

視線を下げつつ、うなだれている青年に視線をやる。その意図を汲み取った恵美香は軽く頷いた。

そして洋を近くの椅子に座らせ、適当なタオルを持ってきて、巻き付けようとする。だがそれを晴美が制し、タオルを恵美香から取

り上げた。不思議そうに恵美香は彼女を見ると、そこには憂いの表情を浮かべている。そしてタオルを巻きつけながら、言葉を漏らした。

「意外に無理をなさるんですね、あなたは」

「昔、よく言われました、お姉さんに」

「気をつけてください。今のあなたには、きつとかつての姉以上に慕っている人が多くいるのですから」

「……ありがとうございます」

そう微笑みながら、優しい声で返す。やっと洋の顔に穏やかな表情が戻っていた。

明裕の暴走も終わり、火も消し止められ、洋の応急処置をしているのを見ながら、どうにか本当に落ち着いたようだと言二は実感した。

だが、よく見れば依然立ちすくんでいる少年がいる。腰でも抜けたのだろうか。いや、それにしては表情がおかしい。戸惑っているという方が正しいだろう。

「義樹、いったいどうしたんだ？」

突然舞い戻ってきた少年の視線は恵美香の方に向いている。光二は首を傾げながら、質問を続けた。

「そもそもどうして戻ってきたんだ」

「たまたま店の近くを歩いていたら、この喫茶店に可憐な少女が人質に取られたって聞いて。それで慌てて戻ってきたら……、え、恵美香ちゃんが、お、男を、せ、背負い投げてして——」

義樹の心の中で何かが崩れているのが、よくわかった。彼にとつては、衝撃すぎる、予想外の出来事なのだ。

洋の応急処置が済むと、恵美香が笑顔で義樹の方に向いた。そして軽やかに足を弾ませながら、近寄ってくる。それに対して、彼は思わず一步下がってしまった。

だが、有無を言わせずに、ぎゅっと両手で恵美香は義樹の手を握ったのだ。

「義樹君、仕切り直しで、もう一度、光二君と話して」

義樹の顔色が見る見るうちに赤くなっていく。照れの赤さではない。

「わ、わかりました。だから放して、もうお願いだから放してくれ！」

そう叫ぶと、ぱつと放した。右手が真っ赤になっている。手を振りながら、痛さを和らげようとしていた。

「大丈夫？ どこか痛いのか？」

「近づかないでくれ。お願いだから、やめてくれ！」

目を丸くしながら、恵美香は立ち止まる。彼女は何をしたか気づいていないようだ。

そして義樹は光二ぐらいにしか伝わらないであろう、心の叫びを露わにした。

「俺のか弱きお嬢様との夏の青春を返してくれ！」

第5話 夏の太陽の下へ (4)

* * *

時が流れるのは早いもので、あの事件からすでに十日以上経過していた。

あの後、洋は明裕に対して何の賠償も求めずに家に帰した。職を失うという、社会人にとっては非常にきつい状況下に置かれた彼に、これ以上酷なことはさせたくなかったらしい。

考えが甘すぎる、もっと厳しくしてもいい、警察に突き出しても十分のことをした、などと口々に言ったが、洋は首を横に振るばかりだった。最終的には洋の意向に沿う形となり、項垂れた明裕の背中を見送った。その選択が正しいかどうかはわからない。だが、正しくあつて欲しいというのは、切なる願いであつた。

そして洋が晴美に連れられて、病院に行った後は、しばらく喫茶店は休業している。正直心配であつた。あの傷では左手はしばらく思うようには使えない。それにボヤ騒ぎもあつた。その他、様々なことが重なって疲れきっている状態かもしれないだろう。

何かしてあげたかったが、すでに光二や水菜は夏期講習が再開しており動きにくい状態だ。だが、恵美香の話より元気だと聞いて、安堵はしている。三年前の事故以来、彼女は洋と連絡を取り合っているらしい。

一方、恵美香から慕われた義樹からは、彼女に毎日無理矢理連れ回されていると叫んでいるのを、ちらりと小耳に挟んだ。それを大変だね、と一声掛けるだけで流している。義樹にとっては大きな誤算だったのだろう。

彼女にするなら、お嬢様で可愛く、大人しい女の子がいい、と豪語しており、そんな少女に出会えたと思つて有頂天に登つていたら、

現実は一つだけ大きく要素が違っていた。

水菜の話によると、恵美香は小さい頃から柔道を習っており、実力も県でも有数らしい。電車の中では痴漢も軽々と撃退しており、警察からよく感謝状をもらっているとも聞いた。一見、大人しい女の子に見えるが、本性は何かを始めたら周りに目もくれず突っ走り、邪魔な奴は容赦なく投げ捨てるらしい。

想像するだけでも恐ろしいなどと、口が裂けても言えなかった。

そんな様々な出会いと出来事があつた夏休みが終わる日に、洋が喫茶店に戻ってくるといふ情報を得た四人は、昼過ぎに喫茶店ソレイユ・デ・レテにやってきたのだ。光二と水菜の塾の講習もちょうど終わったため、四人で顔を合わすのも久々である。

相変わらず入口には休業中と書かれた看板。だが中から音がしていることから、誰かがいるのは丸わかりであつた。義樹が勢いよくドアを開ける。

最初に目に入つたのは、右手で丁寧に机を拭いている洋の姿。

「君たち、いったいどうしたの？」

目をパチクリして、四人を眺める。

「喫茶店を再開するって聞いたから、その手伝いに……」

「ああ、恵美香ちゃんから聞いたんだね。しばらく空けていたから掃除をしているだけだよ。再開は早くても明日以降。それに人手は足りているから大丈夫だよ」

「足りている？ 一人じゃ——」

「上原さん、誰かいらっしゃ——あら、この前のあなたたち」

店の奥から顔を出した女性は光二たちを見て、驚きを表情に出した。夏美の妹の晴美が、動きやすい服装をして立っているのだ。

「彼女にもお手伝いしてもらっている。そんなに広くない店だから、二人でも十分だけど……、もしよかったら手伝ってくれと、嬉しいね」

素直に洋は自分の考えを述べる。その柔らかな微笑みに、光二たちは嬉しそうに頷き返した。

やがて掃除機や濡れ雑巾を中心に、喫茶店内をきれいにし始める。元からきれいであつたため、あまりやるころは無いように思われた。だが十日以上の空けていたため、探せば埃は出てくるものだ。

そして最後に問題に残つたのは、あのボヤがあつた現場。

燃えたところ、特にマットの部分はほとんど黒焦げており、何かあつたのかは一目瞭然である。

「マットを変えれば、いいのではないのですか？」

恵美香がマットを指しながら、案を出した。

「うん、それはごもつともな意見だよ。だからすでに購入はしてある。ね、晴美ちゃん」

「はい、これです」

そう言つと晴美は紙袋から、鮮やかなマットを一枚取り出した。

太陽と空が鮮やかにプリントされている、どこか心が明るくなれる絵柄。

洋は初めて見たのか、その絵柄に見とれていた。

「本当はもう少し色を抑えようかと思いましたが、この喫茶店の名前の通り、明るい感じがいいと思い、これにしました。気に入らなかつたですか？」

「いや、とても気に入ったよ。ありがとう」

大切に晴美からそれを受け取り、床に敷いた。そこから明るい雰囲気広がりは始めているようだ。それを実感しつつ、洋は笑顔で振り返った。

「——さて、掃除もひと段落したことだし、お茶にしようか」
「はい！」

一同も笑顔で頷き返した。

机をくつつけて、六人座れるようにした。それぞれに飲み物を出

してから、やがて洋は大きなお皿を持ってくる。それを見て、感嘆の聲が上がった。

「美味そうなタルトだ！」

義樹が今にもフォークで刺そうとしているのを光二が止めつつ、そのタルトに目を向けた。

夏に採れるものなど、色とりどりの果物がタルトの上にのっている。とても楽しく、明るい気分になれるタルトだろう。

「夏限定の特別タルト、そして僕がこの喫茶店で作る最後のタルト」その言葉を聞いて、一斉に視線が洋に集まる。席に着くと、見渡しながらしつかりと声を出した。

「この前、昔お世話になっていた、パティシエにお願いをして、また修行させてくれるように頼んできた。それを快諾してくれた関係で、九月の中旬にはこの店を一度閉めようと思っている」

「中旬って、また急ですね」

水菜が思ったままに言葉を漏らす。

「早い方がいいと思つて。一応、細々とケーキを作っていたけど、正直言つてかなり三年前よりは腕が落ちている。だから一日でも早く、本格的に再開したくて」

話している表情はどこか嬉しそうだ。明日へ満ち溢れた顔をしている。

それを晴美は微笑みながら聞いていた。

「『ソレイユ・デ・レテ』、これをフランス語から日本語に訳すと？夏の太陽？。姉の夏美と上原陽さんが作り上げようとしていた素敵な喫茶店。それを本当のものにするためにも、是非とも頑張ってきてください」

「ありがとう。いずれは本場に行つて、本当の？夏の太陽？と命名できるケーキを作ってくるよ」

そして晴美に対して手を差し出すと、彼女は笑顔で握り返した。いつしか洋のわだかまりは消え、前に進もうとしていた。自ら閉じこもっていた家から一歩出て、外に出ようとしているのだ。

自分に嘘偽りなく、本当の心に気づいたとき、人はまた新たな道が開けるのかもしれない。

やがて様々な談笑をしている最中、急に雲間から太陽が照りつけてきた。

すると洋がふと思い立って、打ち水がしたいと言い、席を立った。よく夏美がやっていたらしい。それを久々にやると言ったのだ。

晴美や光二たちも、何となくその現場に付いていくことにした。外に出ると、青空の中に現れた太陽がアスファルトを照りつけている。だがその暑さはいつしか嫌いではなくなっていた。

「光二、俺な——」

光二の隣で、顔を空に向けている義樹が呟いた。

「高校に行ってもサッカーを続ける。行きたいと何となく考えている高校、結構強くて、レギュラー落ちが目に見えていても頑張るな」「ああ、その方がお前らしいよ」

晴れ晴れとした表情はいつになく爽やかだった。

光二もここ数週間じつくりと考えて、考えを改めたことがある。

いくら勉強をしても無駄——、そう思わずとにかく目の前のことに集中することに決めたのだ。

諦めて適当に流してもいいかもしれない。もしかしたら、諦めた方が楽なのかもしれない。だが、今できることを精一杯やって、明日という日を迎えたいのだ。

その決断が果たして成功するか否かは、自分次第だろう。もしかしたら失敗して、第一や第二志望の高校が落ちるかもしれない。そうなる可能性もあるが、それを考える前に今はやり抜きたい気分なのだ。

* * *

夏のとある日に、青空の中で煌めいている太陽。

綺麗とは言っても、外はとても暑いため、その下に出ることに躊躇いがでるでしょうね。

けど、思い切って出ることによって、また違った感じ方をするかもしれない。そして中で飲んでいた飲み物の味も、また違った感想を抱け、新たな味を再発見できるかもしれない。

そう考えると、太陽の下へ出てみたいという気も出てこない？

私が好きであつた洋も含めて、彼ら、彼女らには、様々な困難が待ち構えているでしょう。

辛い時もあると思う。でも、そんな時は一度立ち止まって、皆で楽しくお茶でもしてみない？

もしくは風景を変えてみてもいいかもしれない。

そう、夏の太陽の下へ——。

了

第5話 夏の太陽の下へ (4) (後書き)

まずはお読み頂き、ありがとうございました！

コメディ成分をいつもより多めにしたつもりの長編でしたが、読者さま方にはどう捉えられて頂けたでしょうか……。もっと笑いを多くしなくては、ジャンルをコメディにはできませんね。

あくまでこの小説のジャンルは抑えめの恋愛……。いえ青春系だと思っています。

とりあえず楽しみつつも、最後は爽やかな気分で読み終えて頂けたのなら幸いです。

今後も、自分の作風や味を探しつつも、よりいいものを執筆していきたいと思います。

よろしければ、他の作品でお会いできますように――。

本当に、ありがとうございました！

桐谷瑞香 (二〇一〇・五・四)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2027k/>

夏の太陽の下へ

2010年10月8日14時15分発行